
狂った少女はただ笑う

真田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂った少女はただ笑う

【Nコード】

N2726Z

【作者名】

真田

【あらすじ】

執行者 NO14 表裏比興

そんな肩書きを持つ執行者の少女。リア。そんな少女が魔都クロスベルにやってくる。

理由、それは…

「里帰りだけど、何か問題でも？」

元執行者のオリ主はそれなりにいるけど現役の執行者はあんま見ないなあ…自分が知らないだけかもしれないけど。なんてふと思い書いてみた二次創作です。興味のある人はぜひともクリック！

ブローグ 夢の話

最初に言っておくわ。これは夢の話。ほとんど毎晩見ている夢の話。とっても大きな赤い水たまりがあるのよ

それをなめてみると鉄っぱい味がする。

それでこれは水じゃなくて血なんだって気づくの。

私はそれに驚いて近くに何があるのかを見渡してみる。

そしたら、血溜りの中心に一人の女性の死体が転がってて、私はそれに近づいていくの。

そして、近くで顔を見るとそれがお姉ちゃんなんだってことに気づく。

それがわかって泣きそうになると、いつの間にか私は一本の長剣を片手に立ってるの。

その長剣からは血が滴り落ちていて、それに気づいた私は剣の剣腹をじっと見つめる。そこに自分の顔が写る。

その顔や髪にはたくさんの返り血が付着してて、とっても汚らわしい。

それを見てから初めて私は周りを見渡す。

そこにはさっきのお姉ちゃんの死体はどこにもなくて、代わりにた
くさんの死体が転がってるの。

そこで、私が殺したことを思い出す。そして、死体のうちの一つが
言うの。

コノ、ウラギリモノガ…

そして、何かが壊れたような音が響く

は……は……は……あはは……
……は……は……は……あ……は……
……あはは……
……は……は……
……は……
……アハハ……

第一話 結構明るめな話

「すっげ…さすがクロスベル…」

そう驚きの表情を浮かべたのはどこか浮世離れた一人の少女。
真っ白な髪を腰のあたりにまで伸ばし、赤色の目をしていて、顔も十人中九人は可愛いと思うんじゃないかな？ってなぐらいに可愛い容姿をしている。服装は真っ白な着物のような袖の長い服で、帯の部分は鮮やかな赤色。下は赤のミニスカにピンクのニーソックスという和風か洋風かどっちかにしたら？と言いたくなる服装だった。あ、ならない？そうでしたかすいません。

それはともあれ、その少女はあたりをもの珍しそうにきよるきよるで見回していた。例えるなら田舎から上京してきた田舎者だ。そしてそれは別に全部が間違いというわけでもない。

時刻はまだ昼ということもあり、そこはまさに都会といった感じの人通りの多さだった。高いビルがいくつも鎮座しており、目の前を横切って行くたくさんの人。しかもたまに導力車も通って行く。

「導力車って初めて見た…」

そんなことに軽く感動を覚える。昔と随分変わったなあ…と寂しさ半分物珍しさ半分といった心情だった。子供のころはここらへんに住んでいたのだが、ちよつとした一軒でアルテリア法国に引っ越しているのだと八年ぶりとかそのぐらいだったはず。

そしてその少女は初のクロスベルの景色を十分に堪能してから、これからすべきことを思い出す。

「大きな鐘の前とか言ってたっけ…」

まず、彼女はしばらくここで生活するつもりでいた。そのためにはまず家をどうにかしなければなるまい。残念ながら昔住んでいた家などは当に売り払ってしまっている。さすがに好んでホームレス生活をしたいなどとは思わない。

そこで彼女の所属している組織…ぶっちゃけると「結社」なのだが、あの中では一番話の合うカンパネルラが何らかの便宜を図ってくれたらしく現地で案内してくれる人間を紹介してくれるとのことだ。カンパネルラが見せた好意に正直『熱でもあるんじゃないか？』『実はドッペルゲンガーだったりするのじゃないだろうか？』などと思いつつも、人からの行為をわざわざ無下にする気にもならなかったので、とりあえずお願いしておいた。実際にドッペルゲンガーかと聞いてみたら「心外だなあ」とか言いながら笑ってた。

そしてその待ち合わせ場所がここであるのだが…

「…あの人かな？」

その中央に鎮座している、大きな鐘の前のベンチで座っている青年を発見する。…そして彼女は深呼吸をした。なにせあの時紹介してくれたのはカンパネルラだ。絶対普通の人間ではない。あるはずがない。絶対に面白がって何かを仕掛けたに決まっている。星杯騎士団の守護騎士なんて可能性なんかは濃厚である。

ここで考えていても仕方がないと思い、声をかけようとしたが先に青年のほう気づき声をかけてくる。

「こんにちわ。クロスベル警察の者ですが…」

なんで警察？カンパネルラはいったい何をした？なんかの犯罪の濡れ衣かぶせられた？

「貴方が支援要請を出されたリア・ルアルデイさんでしょうか？確かクロスベルの案内をしてほしいという内容でしたが」

「えーと…ちょい待ち」

支援要請…？

と少女…リアは幼いころより教え込まれた知識やら、生まれつき持っている頭の回転の速さを回転させ…納得した。

たぶんこの人が友人の紹介したという案内人というのであっているのだろう。用意したというか警察に頼んだ…なんで警察なのかという疑問は置いておこう。カンパネルラの考えることはわからないし。しかも今のところ裏もなさそう…

え…？

…何もなさそう…だと…

明日は嵐だ…今日中に住むとこ決めないといけないようだ…

「どうかしましたか？」

「あーいや、何でもない。ちょっとぼーっとしてて…改めまして。私が依頼を出したリア・ルアルデイ。今回はよろしく」

リアはどこか気の抜けたようなへらへらとした笑みを浮かべる。

「ご丁寧にも。クロスベル警察特務支援課。ロイド・バニングスです」

「あ、別に敬語じゃなくて結構いいわよ？同い年ぐらいだろうし」

「いえ…さすがに仕事ですし…」

「私は気にしないからさ」

というと、ロイドといった青年は少し表情を和らげて言った。

「君がそういうのなら…短い間だけでもよろしく」

「ん、こちらこそ…さっそく案内してくれるかな？まずは家を探したいから」

「家を探すって…どこか親戚の家に泊まるとかじゃないのか？」

「違うわよ？一人暮らしになるわね」

「そうなのか…」

ふーんという表情をしつつ、ロイドはリアと視線を合わせる。

「それじゃあ、行こうか。家ならまずは行政区に行って空き家のカタログをもらってきた方がいいと思うけど…」

「そこらへんはお任せするわ。あ、でも余裕があつたらこの町の見どころの案内もお願いしていい？それと家はなるべく安いところがいい」

「はは……了解」

「へえ…普段は四人なんだ」

「そうなるかな。今日は全員で行動するよりもこっちの方が効率が良かったから別行動だけどね」

そんな雑談をしながら今は東通りに来ていた。行政区で空き家の力タログをいくつかもらってきたのでそれをもとに家を周りながらクロスベルの案内してもらっている。

「露店とか多いのね」

「結構新鮮な野菜とかが手に入るから結構繁盛してる。あ、あとそこが遊撃士協会になるかな」

と、ロイドが指さした方向の看板には確かに遊撃士協会と書かれていた。あ、そういえば…

「ヨシユエスが今ここに来てるんだっけ？」

「ヨシユエス…？ああ、ヨシユアとエステルのことか？」

「うん、そんなとこ」

ロイドが何か聞きたげにしていたが、それよりも露店に面白そう

なものを見つけたので、そちらに足を進める。

「にがトマト…だと…なんていうものを出荷しているんだリベール…と、こっちは共和国の…」

にがトマトとはその名の通りリベール産のものすごくにがいトマトの事だ。あれで作ったジューズをよく罰ゲームと称して飲まされたなあ…ちよつとトラウマを刺激された…あ、でもちよつと懐かしいな…どうしようか…

「へえ…そういうのって結構詳しいのか？」

「ま、いろんなところ行ってきたからそれなりにいろんなことは知ってるわよ？帝国のおいしい料理とか、共和国のおすすめの観光場所とか…あ、面白そうなのでいえば『銀』のファンタスジックな噂も聞いたことあるわね」

と、にがトマトを置いている店の前で立ち止まりながら何気なくつぶやいた瞬間。ロイドの顔色が変わった。

「『銀』の事を知ってるのか！？」

「知ってるというか…共和国の人間なら誰もが…ってほどじゃないけどそこそこ有名な話よ？伝説の凶手なんて呼ばれてる。それがどうしたの？」

そついうとロイドは数秒だけ考えこんでから少し口を濁してから言った。

「…ちよつと警察の方で追ってる事件に銀が関係してるかもしれないんだ。それでその『銀』の情報が欲しくて、情報を集めてるところでさ。よかつたら聞かせてくれないか？」

「へえ…どんな事件なの？」

「…そういうことは守秘義務があるから言えないんだ。すまない」

そんな警察の立場としての言葉に、リアは別にそこまで興味があったわけでもなかったので特に追及する気もなく、にがトマトを手に取りながら言った。

「ふーん…ま、いいわ。といっても私も大したことは知らなくてのよね。私の知ってることと言えば『銀』って言うのは伝説の凶手…まあ暗殺者とか刺客とかそんな感じの人の事。その人は何世紀もの時を生きて暗器や札を駆使して狙った獲物は確実に葬る…とかいう私の聞いた話ね」

「何世紀って…眉唾物じゃないか？」

ロイドが聞くとリアはにがトマトの購入を本気で検討している様子でありながらも質問に答える。

「そうでもないわよ。知り合いにちよつと裏社会関係の人がいて、その人曰く『銀』って人に依頼を頼めばほぼ確実に依頼を完遂してくれるらしいし」

「…え…」

あつさりと裏社会というセリフが出てくるとは思っていなかったのかロイドの顔が微妙にひきつっている。やがて戸惑い気味に問いかける。

「その人とは…その…大丈夫なのか？」

「いい人よ。それと銀の事だけど…何千年生きてるとかつてのはなんかカラクリがあるんでしょ。まあ、『銀』は本当に何千年も生きる化け物だった！…みたいな展開があつたりするかもしれないけど」

「いや、そんなに生きられないだろ」

苦笑しながらロイドが言うとりアはふざけた様子もなく真顔で答える。

「そう思う？でも世の中って不思議で満ち溢れてると思うわよ。常識で考えられない事って結構多いんだから」

実際にカンパネルラって全然年取ってるように見えないし。あれも不思議だよなあ…と心中で呟きつつ。やっぱり怖いもの見たさ的な感じで買っておこうということにがトマトの購入を決定し、気よさそうなお兄さんにミラを支払う。

「それと『銀』が最近黒月とか言うマフィアに雇われてクロスベル入りしたみたいだけど…さ、次行こ」

「君はいつたい何者なんだ…」

「ふふ。そこは秘密。ミステリアスな女性に男性は引かれるってね」

「そ、そうか…」

「ま、冗談はさておき…次は旧市街ってところに行ってみたいなあ。あそこのマンションが格安じゃなかったけ？」

とロイドに聞きながらさっそくにがトマトをかじってみる。……………

くおおおおお…や、やっぱり苦い…

「吐きそう…」

「…大丈夫…か？」

「あんまし…好奇心は猫をも殺すとはこのこと…」

もうこれ買わない。と心に誓いつつ、2、3回深呼吸をして何とか持ち直す。と、さりげなくロイドがジューズを差し出してくれた

のでそれを一気に飲みし口直し。

「ふう…ありがとう」

「どういたしまして。というかそんなに苦いのか？」

「食べてみる？」

と、まだ一口しか食べていない…というかこれ以上食べたくないにがトマトを差し出す…いや押し付ける。いやもう代わりに食べてくださいお願いします。

「それじゃあ、一口だけ…」

と言つてロイドも怖いもの見たさなのかパクリと一口。と、そこで今更ながらリアは気づいた。そしてちよつといたずらっぽい笑顔を浮かべ、わざとらしく呟いてみる。

「これって関節キス…？」

「~~~~~ !?」

のどに詰まった!？

「あ、ちよつ…大丈夫!？そこのお兄さん!そのお茶頂戴!」

まさかそこまで慌てるとは思わなかったリアが慌ててお茶を購入。それをロイドに差し出す。それを一気に飲み干していた。

「はあ、はあ…ふう…」

「えと…大丈夫？」

「…何とか」

と言うロイドの顔が少し赤い。それを見て悪戯っぽく笑う。

「顔赤いよ？どうしたのかな？何を考えたのかな？ほれほれ、お姉さんに言ってみ？可愛い女の子と間接キスできて嬉しいとかさ」

「あ、え、あ…と、とにかく！次は旧市街だっけ？さっそく行ってみようか！」

「…………ま、いいわ。それじゃあお願い」

顔をそむけ、背中を見せてさっさと歩きだしたロイドをリアはにやにやしながら追った。

第二話 あいさつとか墓参りとか

結局のところ新住居は旧市街にあるマンションの小さな部屋に落ち着いた。最後の最後までロイドは治安が悪いからと心配していたものの、安いし上に特に不満があるわけでもない部屋だったのでここに決めた。というか一般人が彼女を襲うこと〓死亡フラグである。いや冗談ではなく。

「ありがと、ロイド。助かったわ」

「いや、これも仕事だからね。困ったことがあればまた連絡してくれ」

「うん。了解。遊撃士よりも早くした方がいい？」

「ははは……」

と、最後に苦笑いを浮かべながらロイドは去って行った。さて。

「どうしよっかなー……」

まあ、ここクロスベルに来たのはただ単にリアが所属している結社で結構大きな一件がリベールで少し前に終わったのだ。ずっと自分は裏方で表舞台には一切出なかったけど。そしてしばらく暇でどうせ行きたいところもないし故郷に帰るかなと思っただけであり、しばらくはここに滞在するつもりだ。と、思いながら安物の部屋ゆえに別にふかふかであるわけでもないベッドにダイブする。さて……どうしようか……と、脳内でやるべきことというワードで脳内検索をかける。しかしそれで出てきたのは案外少なかった。ま、とりあえず……

「……行っただ方がいいわよね」

まだ一度も行っていないしな……などと思いながらベッドから起き上がる。その前にどこかで花買ってこないと……などと簡単な予定を立てる。

「ついでにお隣さんにあいさつでもしてこよっかな」

礼儀は大事だね、うん。

リベールを大混乱に陥れた犯罪組織の執行者とは思えないことを呟きながらリアはベットから体を起こした。

「いなかった……」

お隣さんは留守にしていた。噂では気立てのいい若い娘さん。巨乳。ずっとどこかに出かけていて家にいることは少ない。らしい。仕方ないので出直してくることにしよう。それでも他の何人かの人間には挨拶してきたのだが。いまだき礼儀正しい子だと穏やかなおばあさんに褒められた。うん。褒められると結構うれしいものがある。

「……」

と、少しだけ機嫌よくマンションのドアを開き外に出ると…

「てめえ！サーベルバイパーなめんじゃねえぞゴラ！！」

「つぶ…これだから野蛮人は…」

今にも喧嘩をおっぱじめそうな二つの集団があった。片方は赤いジャージ。もう片方は青いフード付きのジャージ。

「平和ねえ…」

かなり一般人よりかけ離れた感想を漏らしつつその集団を避けながら歩き出す。自分から厄介ごとに巻き込まれる理由はない。と、そんな時。

「やあ、久しぶりだね」

「？」

そんなリアに涼しげな男の声がかかる。こんなところに知り合いがいるはずが…と思いながら後ろを向く。そこには青いジャージの集団を遠目に見ていたらしき涼しげな男が…

「つぶ…くつくくははははは！！！！」

ツボに入った。

「いきなり笑うっていうのはなかなか失礼じゃないかい？」

「ご、ごめ…ぶつくく…い、いやだって…つぶ…ははは…っ…ワ、ワジく…つぶくく…な、何それ…に、似合います…ふふ…くくく」

そこに立っていたのは身喰らう蛇の天敵。永遠のライバル？ナルトとサスケ？いやこれは違うか…まあ、それはいいとして、星杯騎士団の守護騎士とよばれる結構なお偉いさん。ワジだった。

ツボに入った理由。それは服装にあった。似合わないわけじゃない。むしろ似合いすぎてた。普段と違ってなんかきつちりした服じゃない、腹チラしているというイケメン以外の男が着るには危険な服だというのに。おっそろしいくらいに似合ってた。それが逆にツボに…

「やれやれ…一応僕らは敵同士のはずなんだけどね」

「まあ、細かいことは気にし…ふふ…つくく、はははは」

やばい。これ普段ならシリアスでないようなシチュエーションなのに。まさかこれも作戦！？こうやって笑わせて戦えなくする気！？…んなわけないか。アホらし。

「ぜえ…ぜえ…ふう…よし。落ちついた。改めて久しぶりね。ワジ君」

「そうだね。あれ、少し身長も伸びた？」

「うーん…どうだろ。こういうのって自分ではわからないしね…あ、アッバスもおひさー」

友好的にあいさつしたのに微妙に殺気を出しながら戦闘態勢を取られた。あいさつはしっかりしないとダメだよ。人間第一印象っていうのはものすごい大事なんだから。いや初対面じゃないけど。

「ま、いつか…それはそれとして。こんなところでなにしてるのよ？」

「ふふ…今の僕は『テストメンツ』っていう不良のヘッドだよ」

「どっちの？」

「青い方」

ワジが指さしたほうを見る。

「各員！聖戦の準備だ！」

聖戦って…

「神父さんが何やってるのよ…罰当たりじゃない？」

「ふふ…まあ、いいじゃない。それで、君は何しに来たんだい」

「微妙にはぐらかされた気はするのだけど…ま、いいわ。大したことじゃないしね。ただの里帰り」

「…つぶ、アハハハハハハハ…！！！」

今度はワジがツボった。

「ふふ…いやいや、執行者が里帰りって…なかなか面白いジョークだね」

「うん。これなかなか腹立つね。殴っていい？つか殴るぞゴラ」

「お互いさまじゃないか」

「…それもそうね。ま、ここであなを殺したとしても大して得しないし」

真顔で物騒なことを言うリアに対しアツバスは警戒を強める。というかアツバスの反応が普通なのであって、何度か本気で殺しあったこともあるこの二人が和やかに談笑しているほうがおかしい。

「ま、そういうわけさ。ここはお互いに知らぬふりしようよ。こんなところでそんな不良のヘッドなんかしてるってことはなんか訳ありなんですよ。………そういえばこの教区長ってあなたたちの事

嫌いだったけどそれと関係あるのかしら？」

「ふふ、さすがは『表裏比興』鋭いね」

「それで？」

「いいよ。僕だってこんなところでいきなり殺り合いたくはない」

「…そつか。それじゃあ、今からただのご近所さんになるわけね。よろしく」

リアは和やかに笑みを浮かべる。友好的でどこか愛想笑いにもとれる普通の笑み。

普通としか表現できない、適度に不自然なところのある笑み。

それを見てワジは言う。内心では警戒しながらそれをおくびにも出さずに愛想笑いを浮かべる。

「フフ、こちらこそ」

「びっくりした…」

まさかあんなところでワジに合うとは思わなかった。本気でなんでもいるの？とはいえ考えて判断できるほどに情報も集まっていらないので一旦その思考は打ち切る。まあ、一応整理はしておこう。

まず、星杯騎士団とは？から説明しようかと思う。誰にかつて？おいしい、野暮なこと聞くなよ。そこは流すのがお約束だろ、ジョニィ。

まず前提としてアーティファクトと言う大昔に作られた古代遺産と言うものがある。それは物によって効果は違うもののものすごい力を持っている。そんなものを「一般人が持つていいもんじゃねえんだよゴラ！だから俺らによこせや。なに、素直に渡せば痛い目みずすむぜ？」みたいな事をやってる組織だ。ちよつと乱暴な言いようだがあながち間違つてはないと思う。

まあ、言い分も分かるんだけどね。確かに誰かがしなくちゃいけないことではあると思う。

そんな組織と何故敵対しているかと言えばだ。

まあ、アーティファクトを保持してるんだよね。『身喰らう蛇』って。というか星杯騎士団とは別で自分たちの目的のために使うためだから、星杯騎士団とは真っ向から対立するような関係になつてしまう。私利私欲のために使う人間からアーティファクトを没収するための星杯騎士団と、私利私欲のためにアーティファクトを集める結社。対立しない方がおかしい。

と、そんな関係でワジを含め守護騎士とは数回殺りあった。全部適当に逃げたけど。

以上。説明を終わります。

「ケビンじゃないのはよかったけどさあ」

と、呟きながら、彼女は教会の敷地内にある墓場に佇んでいた。…
うん。星杯騎士団のクロスベル支部ともいえるような場所にだ。ま
あ、ここのお偉いさんは星杯騎士団のことを嫌ってるし何とかなる
だろう。

そんなリアの手には三つの花が握られておりそれぞれ白、青、黄と
なっている。

「…うる覚えでしかないけど…あってるかな」

クロスベルでの風習で墓に沿える花はこの三色の花だと決まってい
た。…たぶん…きつと…おそらく…会ってるといいな…

だんだん自信がなくなってきたが間違っていたとしても出直すの
は面倒だったので気にしないことにした。気にしたら負けという奴
だ。たぶん嘘だ。

そんなくだらない自分の思考にリアは苦笑を浮かべつつ、改めて
目の前の光景を眺める。彼女の前にはたくさんの墓石が視界いっぱい
に広がっていた。

「えーと…順番に見ていくしかないわね…」

約十年ぶりに来た場所なので忘れていたり、いくつか新しい墓石が
建てられていたりと目的の場所がわからない。幸い時間はタップリ
あるので一つずつ順番に石に刻まれた文字を読んでいく。

そして半分くらい確認したところだろうか。

「見つけた…」

そこには『セレナ・ルアルディ　ここに眠る』とだけ書かれていた。
持ってきていた花をそつと添える。

「久しぶり、お姉ちゃん。亡くなってから十年間。一度もこれなくてごめんなさい」

もう、涙が出てくることはない。長い時間が経ったから。風が吹き、リアの純白の髪が風にもてあそばれる。

「いろいろあったんだよ。ゼムリア大陸の全国各地を回ったりしてね。なんというか…ほんと国によって雰囲気って違うんだね。同じ人間なのに…驚いたよ」

そんなどうでもいい話。しかしそんな言葉にも返事はない。当たり前だ。これはただの大きな石なのだから。そんなの…分かってる。分かってるんだ。

しばらくの間じっと墓石を見つめる。

………

………

………

………

…

「なんで…お姉ちゃんだったの…？」

どのぐらいの時が立っただろうか。リアは無意識にぽつりとつぶやく。

「世の中お姉ちゃんよりもダメで、くだらなくて、生きている価値もないような糞みたいな人間がたくさんいるのに。なんでそんな奴らじゃなくてお姉ちゃんなの？なんで死んじゃったの？お姉ちゃんが何かしたの？何か悪いとをしたの…？」

今まで一度も吐き出すことのなかった思い。

すべて吐き出す。

そして、自分のしゃべっていることに可笑しさを覚えた。今の自分はその生きている価値もないような糞みたいな人間の一人なのに。

「もしもお姉ちゃんが生きてて…そして今の自分を見たら…叱ってくれた？…怒ってくれた？…だったら…いいな」

それは自分を愛してくれてる証明でもあるから。でも、その答えはもうわからない。もう本人はいないのだから。

そして幾分落ち着いてくると、馬鹿らしい…と自分の事を鼻で笑う。何がしたかったんだろう私は。

「…バイバイ。また来るから。今まで来れなかった分。たくさん、たくさん」

そういつて。その場を後にした。

第三話　ちよい伏線と星見の塔へ

クロスベルのどこかにある一つの部屋。そこな中に二人の人間がいる。

両者二人とも全身を覆う黒衣のローブを身に着け、動物をかたどった仮面をかぶっている。顔はおろか性別や年すらわからない。

「隊長。報告に上がりました」

「どうだった」

隊長と呼ばれた人間に対し、おそらく部下なのであろう人間は、尊敬の念を込めた眼差しを向け報告を始める。

それは、様々な情報だった。ルパーチエ商会の事、黒月ヘイユエの事という裏の情報から、遊撃士や警察への市民の目。そんな真面目な報告に交じっておいしい料理の店とか言うよく分からない物まで。統一性のないもの。

共通点の一つ。クロスベルでの事だと言うことだ。

そして港湾区のラーメン屋はうまいという報告を最後に従のほうは口を閉じた。

「聞けば聞くほど歪な場所だな……」

「……え？おいしいラーメンの店を聞いてなんでそんな感想？」

「馬鹿者。今はシリアスパートだぞ。黙ってる」

「……すいません」

それだけ言って両者共口を閉じる。そしてその情報の分析というのは全くやらなかった。

彼らは理解していた。自分たちは主の手足。命令された以上の働きはしないし、そんなことをしても成果を上げることなどできない。

動くのは俺たち。どう動かすかを考え、利用するのが主だった。

「…最後に直接は関係ないのですが、一つ気になることが」

「なんだ？」

「星見の塔。及び月の僧院と呼ばれる場所で上位三属性が働いているようです」

「なに…？」

上位三属性と呼ばれるのは空・時・幻の三属性の事だ。

「具体的には？」

「まだ詳しいことはわかっていませんが、そこに出没する魔獣に対するアーツの効き方が異常だということです」

その確かに不可思議な報告に隊長と呼ばれた男は静かに数秒間黙考する。

「主は、おそらく何人かを調査に向かわせようと指示するだろう。

星見の塔には私が行こう。月の僧院とやらには三人、いけそうな者に準備させるように。編成は任せる。以上だ。下がれ」

「っは！」

そう返事をし部下と思わしき男は半透明になり虚空に消える。そんな不可思議なものを見ても隊長はいつもの事だともいうように平然としている。

「魔都クロスベル。なかなかお似合いな名前じゃないか」

そう無感情に最後に呟き、黒衣の男も虚空へと消えた。

時と場所は変わり。

「だから私じゃないって言ってるでしょ。冤罪だぞー！訴えてやる！」

「それじゃあ、あなた以外に誰がいるんですか？」

「知らないわよ。たまたまタイミングが悪かっただけよ」

そんな会話をしているのは二人の女性。片方はリア。もう片方は警備隊の制服を着た女性だった。名をノエルと言うらしい。

sonでもってここは星見の塔と呼ばれる場所の入り口であり、入り口に立てられていたバリケードは完全に粉碎されている。

「だから、私がここに来たのはただの興味だって言ってるでしょ。

来たら壊れてたのでラッキーってことで入っただけだって、ね？納得してよ」

「そんなウソ信じられるわけじゃないですか。それ以前にここは一般人立ち入り禁止です」

「ほらほら、そんな厳つい顔しないでさ、もっと笑って笑って。しかめっ面でいるのは損だよ？」

「誰のせいだと思ってるんですか！」

「それは永遠のミステリー！。少なくとも私ではないわね」

わけのわからないことを言うリアだった。

そもそもどうしてこうなったかと言えばだ。今日は墓参りに行った翌日。リアは、ちょっと気になることを聞いたのと、ただ単に暇だったこともありこの中を探索してみようという気になったので来てみたら、入り口をふさいでいたのであるうバリケードが粉々になっっていた。

常人なら『なんでだ?』みたいに多少疑問に思うであろうこの状態を見たリアは「ラッキー」などと言う軽い感想を抱きつつ中に入ろうとしたら…

なんかいるのね。後ろから装甲車が走ってきてるのね。しかもなんかその女の子止まりなさいとかスピードカーで言われるのね。しかもこの場には壊れたバリケードと、中に入ろうとしているリアがいる。

そんで「バリケードを壊して一般人の立ち入り禁止区画入ろうとしている不審者」と言うふうに勘違いされて今職務質問を受けているといったところだ。というか不法侵入自体は事実だったりする。

そんな感じでかれこれ十分ほど不毛な言い争いをしたところだろうか。そんな時に第三者の声がかかる。

「どうしたんだ? 曹長」

「あ、皆さん。お久しぶりです」

「あれ、ロイド? どしたの」

そちらを見るとロイドを筆頭とした四人グループがいた。知ってるのはロイドだけだけど。昨日言ってた支援課のメンバーだろうか?

「ああ、誰かと思えばリアか。昨日は情報ありがとう。助かったよ」
「いや、ただの噂話だし、お礼を言われるほどじゃないわよ」
「なんだロイド。この可愛い子と知り合いか？」

そっけつなのは赤毛のチャランポランそうな男。それとロイドのほかには育ちのよさそうな同年代の女性。そして…自分より年下の女の子。

青というには少し薄い水色の髪。

ぺったんこな俎板のような胸。

どこか冷めたような印象を受ける整った顔立ち。

さほど高くない身長。

「抱きしめていい!？」
「何言ってるんですか…」

その女の子を見た瞬間にリアの目が変わる。アニメ的に例えれば星になった感じ。リアは素早く女の子の背後を取り、いきなり抱きしめ始めた。周囲はドン引きである。

と言うかドン引きしないような人間がいるだろうか？初対面の幼女といってもさほど間違いではない女の子に対して、鼻息荒くして、迫り、いきなりを抱きしめる…これがもし中年のおっさんでだったら確実にアウトだ。

女に生まれてよかった！

今この時ほど、彼女が女として生まれてきたことに感謝したことはないだろう。

「おお…レンちゃんと十分張り合える抱き心地…」

「離してほしいのですが…」

そんな普通の人間なら慌てる…というか軽く身の危険を感じるような状態でもその女の子はクールだった。冷静にその拘束を解こうとする。そんな抵抗を感じるとリアは素直に離れて行った。

「ケチ」

「初対面の方ですよね？」

ぶーっと不満そうな表情を向けるリアに女の子は南極の氷びつくりの冷たさを誇るジト目で答える。クスン…何よ…ちよっとしたスキンシップじゃないの…

「ロイドさん。この方は？」

小さな女の子が唯一リアを知っているロイドに問いかけ、ロイドは昨日町案内をした事を説明する。そしてリアには、この人たちが警察の同僚だと説明した。

「ティオ・プラトーです」

「ティオ…？」

復活したリアがそう名乗った小さな女の子…ティオの顔をまじまじと見る。可愛すぎて鼻血でそ…じゃなかった。…あの時の…？

その事に関しては、今は関係ないので一旦思考の隅へと追いやるとして、ほかの二人もすごいメンツだ。

赤毛でしかも苗字がオルランドの男。あれと同じ赤毛だし、ほぼ間違いなく、あの化け物の息子さんだろう。…あれを一時期利用したことあったけどマジで化け物だよ…その父親の弟もだけど。

それともう一人のマクダエルという名字の女性。たぶん市長の娘さんだろう。あの市長さんひげが立派だよな！

リアも端的に最低限の自己紹介を済ます。

「と、それいいとして…曹長とリアはどうしたんだ？なんか陰悪な雰囲気だったけど…」

「冤罪をかぶせられそうになってる。ほら、ロイド達警察の出番よ！いや、それ以前に男なら弱い美少女が困ってたら助けてあげないと！」

「この人がバリケードを壊して侵入しようとしてたので…」

「だから、壊してないって…」

「ああ、ほらほらリアも落ち着いて。俺たちにも分かるように説明してくれ」

そんなロイドの声にリアは何度か深呼吸をしてから、ノエルとともに説明を始めた。

「事情説明なう」

「ねえ…それって…」

「うん…俺もたぶんリアじゃないと思う」

「どういうことですか？」

育ちのよさそうな巨乳…じゃなかった女性…エリイとロイドがそういう。ノエルがなぜかと聞くと、ロイドはその事を説明しはじめる。

？イリア・ブラティエという大スターに銀と名乗る人物が不吉な手紙を送りつけ、それを支援課で調査することに。

？そしていろいろあつて、今日の朝『銀』から挑戦状？みたいなのが届き色々なところを回った結果今ここで特務支援課を待ち構えているということが分かったらしい

？そんでもってたぶんそっちが原因じゃね？

てな感じの内容だった。それを聞いたノエルは特に疑うこともなく、リアを申し訳なさそうに見る。

「そうですか…えと、リアさん。すいませんでした」

「あ、いいいいいよ。女の子だし。それじゃあ、私は行くわね」

と極めて自然な感じで背を向けるリアをそのまま見送り、さて、俺たちも行くか！ってな空気になったところで…

「待った」

何か違和感に気づいたロイドが止めた。

「んー…どうかした？」

「バリケードを壊したのが君じゃないとはいえここは一般人立ち入り禁止だ」

「えー…いいじゃん、別に」

「ダメだ。危ないだろ」

危ないのはリアではない。襲った魔物の方である。

「大丈夫だって、それなりに戦えるから。自分で言うのもなんだけど結構強いよ」

「さつきか弱い美少女が何とか言っただけだったか？」

「ええい！人の上げ足ばかりとって！これだから若いのは…」

「いやいや…」

そんな適当な軽口をたたきながらリアは太ももにつけているホルスターと腰につけている鞘から愛用の拳銃と長剣を取り出す。長剣は黒色。もう片方の拳銃は白で統一されている。しかし、白い拳銃の銃身の下にはただの拳銃にあるはずのない刃が仕込まれており、日光を反射してキレイに光っていた。

「拳銃…？」

「いや、銃剣じゃねえか？」

「そ、ランドル…ランディさん正解。これとアーツが得意かな。まあ、ぶっちゃけ器用貧乏」

あつぶねえ…本名で呼ぶところだった…その銃剣と長剣をしまいつつながら改めてロイドを見る。

「というわけで。自分の身ぐらいは守れるから大丈夫！」

「いや、だから…魔獣だけじゃなくて銀って言う伝説の凶手も待ち構えてるかもしれないだぞ？」

そのまま長時間不毛な進展のない言い争いを続け…

「はあ…分かったよ。ただし危険だと判断したらすぐに出てもらう

ぞ！」

「OKOK。それじゃあよろしくね」

ロイドが根負けした。

第四話（前書き）

東通りにいるメイリンちゃん可愛すぎる…旧市街で店番やってる
ジンゴちゃんも可愛いよね！

第四話

「おおー綺麗なところね…意外なことに」

中に入って最初に出迎えたのは宙に無数に浮かぶ光。おそらく蜚だろう。近年急激に発達したクロスベルでは見ることでできない物だった。リアはその光景を満足いくまで眺め、脳膜に焼き付けてから地面や近くにある手すりやらを慎重に観察し始める。

「んー…ほとんど人の出入りはなしだけど…つい最近…というかちよつと前に二人ほど通った形跡ありと…どちらも手練れっぽいけど、その中でも一人はヤバイ…足跡に全く乱れもなく重心が安定してる…『銀』かね？」

「二人!？」

ロイドが驚きの声を上げる。

「ちよつと前に二人がここを通ったのは確かね。まあ、銀ともう一人は別口で入った…という可能性はあるけど」

「そうか…」

「…なんでわかるのかしら？」

「よく見れば足跡とかそんな感じのものが見えるものなのだよエリイ様」

「…何で様付け？」

「なんか雰囲気がお嬢様っぽい。実は市長の一人娘だったりするでしょ？」

ハトが豆鉄砲を食らったような顔を浮かべる。…そっぴや豆鉄砲って何？

「まあ…そうだけれど…わかるものなの？」

「人を見る目はあるつもりよ。あと、ランディもなんか隠してるこ
とがあると見た」

と言った瞬間。ランディが怖い顔をした。

「…何のことだ？」

「いやだなあ。冗談よ冗談。それとも本当に何かあるの？」

ランディは舌打ちを一つ。そして微妙に空気が重くなる。

「……………」

「ティオ？どうしたんだ」

と、話題を変えようとしてもしたのかさっきから沈黙していたティオ
にロイドが声をかける。

「…どうやらここでは法則が捻じ曲がって上位三属性が働いている
ようです」

「へえ……………」

リアもそれは入った当初から感じることはできていた。ただ、そ
れに誰かが気づくとは思いもしなかった。

「ねえ、教会の関係者だったりする？」

「いえ、全く」

「ふーん……………」

教会のシスターとか神父とかだとそのようなものを感じれるのは

必須スキルだったりするのだが。表情の変化や、息づかい、体の細かい動き。それらを見てもこの少女が嘘をついているようには見えない。ただ、感応力が高いだけ…？まあ、いいや。世の中の事のすべてを理解できるわけもない。

そしてテイオが説明する。

「はい。土・火・水・風それ以外に上位属性と言われる幻・空・時が加わっています。…つまり火や風に弱い魔獣はいても、上位三属性に弱い魔獣はいませんが、その法則が捻じ曲がって上位三属性に弱い魔獣がいると考えられます」

「…お話し中悪いけど構えたほうがいいわよ？」

と言つて太ももあたりにつけてあるホルスターから銃剣を、腰の鞘から長剣を引き抜き、構えを取る。

「もうすぐそこに来てるから…ね」

それが合図だったかのようにそれは現れた。

「中世の錬金術師がつくり出したオーバーマペット!？」

そう、その姿はまるで…

「アルフォンスさん？」

鋼を錬金術で武器化する主人公の弟さんを巨大化したものだと思っ
てくれればあながち間違いじゃない。それが二体ほど。

「来るぞ！」

ランディがそう注意を飛ばす。しかしそれ以前にリアは動いてい
た。

動いていたといってもさほど激しい動きではない。白色のパーツ
で組み立てられた銃剣の銃身を右のオーバマペットに向けただけ。
そして、引き金を引いた。それはオーバマペットが大きく後退す
ほどの威力を持ち、鎧のお腹にあたる部分もベコリとへこむ。
しかし、ただの銃弾が飛び出たわけではなかった。

「オーバルアーツ…？」

オーバマペットにヒットしたのはアーツを思わせる赤色の光。そ
れがレーザーのようにヒットしていた。

「ぼーっとしないで！もう一匹は任せるから！」

「あ…っよし、皆行くぞ！」

そのリアの声にハッとロイドが仲間たちに声をかける。その様子
をチラリとみてから、目の前のオーバマペットに視線を戻す。

「やっぱ、火はあまり効かないと」

そうつぶやくとリボルバーの形をしている銃剣の、本来なら弾丸を入れるための場所：シリンドーを二、三回回転させる。

そうしてから、イノシシのように突っ込んでくるオーバマペットに対して、引き金を引く。すると今度は黒い、時属性のレーザーがヒットしオーバマペットの顔面を打ち抜いた。

この銃剣の特長は弾丸の代わりにアーツのようなレーザーを撃てること。しかもシリンドーを回転させることで属性も変えられるという優れたものだった。

そして今、目の前にいるのは頭を失ったことで、視界が完全に失われたオーバマペット。

「戦技：釣り野伏せ」

釣り野伏せとは：かのカルバートよりさらに東にある島国「ニホン」と言う国の軍人の一人。島津が得意とした戦法の一つだ。

まず全軍を三つに分ける。そのうちの一つを敵の前方に配置して囷となり、残りの二つを伏兵として左右に配置する。そして囷の部隊が敵軍と戦闘し、適当なところで伏兵を配置した場所まで退却する。

あとはそのおとりを追撃してきた敵兵を伏兵と囷部隊で三方から包囲。上手くいけば相手が調子に乗っているところを奇襲できるのでかなり効果的。

ただ、自然な退却に見せねばならず、しかも戦場での退却は容易に部隊が瓦解しかねないのでかなり難度の高い戦法と言える。

そんな技名を叫びつつ、一息で視界を失った哀れな敵へと近づく。

「ハッ！」

一息で呼吸を整える。そしてリアは銃剣を敵の胴体に突き立てる。しかしさほど刃が長いわけでもないので貫くには至らない。でも、それでいい。銃口が敵の体内に入ってしまったえばそれでいい。

そして、敵の体内から銃撃を放ち、アーツ製の弾丸：魔弾ともいうべき銃弾が相手を貫き、消滅させた。

…ちなみにこの技名とさっき説明した戦法との関連性はこれっぽっちもない。ただ単に何となくリアが気に入っているだけである。

「次っ…！」

それを確認した瞬間にリアはもう一体のほうへと視線を受ける。

しかしそちらへの加勢はいらなかったらしく、そちらもちょうど片付いたところらしかつた。ほっと一息ついている。

「全部一人で…すごい…」

「ふふん。もつとも褒めたまえ」

ノエルの感嘆したような声にリアは大きくもないが小さくもない…いやどちらかといえば小さい胸を張り自慢げな声を上げる。

「おい、作者。やるかゴラ、アア!？」

ゴメンナサイ。

「でも、確かにすごいわね…あなたいったい何者なの？」

「実は私、身喰らう蛇っていう世界を裏から操る謎の結社の執行者なの」

「…あっそう」

エリイの顔を見て絶対信じてないなこの人と思いつつもと信じてもないと思つて言つたので気にしない。というか信じられたら困る。というか一部の人間を除き頭を疑う。大抵の人は冗談だと思つたろうし、その冗談が本気だと悟れば頭の痛い人で終わるはずだ。

だって若い子供がかかる恐ろしき病…中二病っぽい妄想だし。裏から世界を操る組織がいるのを知つてゐる？って超真面目な顔で友達に言われたらどう思う？…つまりはそういう事だ。

「とにかく、この戦力なら探索できないわけでもなさそうだ。気を付けて進もう」

「了解です」

そんなロイドとノエルの声を皮切りに探索が始まつた。

「おお…古代語で書かれた本つてところかな…ってかこれゴーレムの作り方の本じゃね…もらつていつても…」

「ダメだ。勝手に持ち出していいものじゃないだろ」

「ケチ」

ばらばらと流し読みしてから本棚にその本を戻す…と見せかけてこっそりとウエストポーチに仕舞い込む。帰ったらちよつと読んでみよう。作れそうなら作ってみよう。

そしてなぜここに本があるのかといえば…なんでだろうね？探索してたら大量の本が眠ってる場所を見つけたのでリアが興味津々でぺらぺらとめくり始めたというだけだ。

そんなこともありながらも一行は魔獣を蹴散らしつつ進み、ついに最上階に到着する。

そこには巨大な天球儀と巨大な本棚があつた。しかしそれでも狭いと感じさせることはなく、今まで通つてきた場所と違いがらんとした広い場所だった。…なんか人の隠れてる気配が二つあることにリアは気づいたが、両者ともにいるというだけで場所が良くわからないのでとりあえず無視。用があるなら勝手に出てくるだろう。と思つた矢先に。

「フフ……。古の錬金術師どもが造つた夢の跡といったところか」

本棚の上から声が響く。そちらを見れば黒装束に仮面をつけた一人の人間がいた。…男？女？どっちだろ…全身が隠れてて体格も分からないし、声も作ってるし、仮面で顔は見えないし。

「お前はっ…」

「黒装束に仮面…」

「出やがったな…」

「フフ、初めまして。特務支援課の諸君。まあ、招かざる客が今日に限って多いようだが…」

と、ノエルとリアを見ながら言う。

「私はただのサポートです」

「私は別にあなたに用事はないし…用事が終わるまでそこで本読んでるから頑張つて。と言いたいところだけど…まあ、乗りかかった船だし混ぜてもうわよ」

軽口をたたきながらも、いつでも動けるように重心を落とし、軽く全身に力を込めておく。

「まあ、貴様らだけではないのだが…」

と、虚空を見ながら…まるで誰かがいるかのようにつぶやいてから本棚から飛び降り、綺麗に一礼する。

「お初にお目にかかる。銀というものだ。まずはここまでご足労賜ったことをねぎらおう」

「……ああ、随分と引きずり回してくれたもんだな。ちなみに、塔にいる奇妙な魔獣はあんたが用意したものなのか？」

「フフ……あれは元からこの塔の中に徘徊していた。腕を鈍らせないうつ、齒ごたえのある狩り場を探してこの塔を見つけたのだが。中々どうして、面白い場所だ」

「あんたがやったことじゃないのか？」

と、あての外れたような顔をするロイド。

「まあ、個人でどうにかできることでもないでしょう」

「そうなのよね…ねえ、さつきから気になってるんだけどあなたって男？女？どっち？女だったら正体は誰も知らない孤高の女暗殺者ってな感じで萌えるんだけど」

「萌え…？」

「別に知らなくてもいいわよ」

ロイド。君にその言葉は似あわない…と思う。

そしてこういうタイプは仮面を取るとめっちゃ美少女と相場は決まって…っ！などと黙考していると銀が突如として武器を構える。それは黒塗りの大剣だった。あれ、萌えとか言ってるから怒った？…そうよね…結構かつこよく登場したのに萌えとか言われたらおこるよね…

「どう言つつもり!？」

「弱き者には興味はない。お前達が、我が望みに適う強さを持っているか…その身で証明してもらっぞ!」

「あ、そうですか。無視ですか」

リアの言葉は全面的に無視されたく、エリイの疑問にそう答える。それに対して一同は一斉に武器を構えた。

「やっぱりお約束ですか……」

「ねえ、気になって今日の夜眠れなさそうなんだけど。男なの？女なの？」

そうめんどくさそうに言うティオと無視されてもめげずに質問するリア。

「へっ、多勢に無勢と言いたところだが……気をつける！ コイツ、すさまじく強いぞ!」

「どうやら手加減する必要はなさそうですね……!」

「ええ、全力で行きましょう!」

闘志をみなぎらせる一同を、喜ばしそうに銀は見る。

「フ…… 良い闘志だ。それでは行くぞ！」

「ねえ、何で答えてくれないの？」

銀はその言葉を最後にロイド達に突っ込んでいった。

第五話 『銀』と書いて『イン』と読む不思議（前書き）

主人公の使ってる銃剣のイメージは小型版ベルゼルガー的な。

第五話 『銀』と書いて『イン』と読む不思議

「戦技：鶴翼」

そういつと同時に銃剣を逆手に握る。そして、向かってくる銀が彼女の間合いに侵入したその瞬間。長剣と銃剣の両方を振るい、十字の形に切り裂く。

しかし銀はそれらを間合いの外に空中に逃れて躲す。リアもそのぐらいで仕留められるとは思っていない。相手が躲すと同時に銃剣を持ち替えており、ピタリと照準を銀へと合わせる。そして三回ほど連続でトリガーを引き、白色の魔弾が銀を貫かんと襲い掛かったが、それすらも空中にも関わらず体を捻って躲す。

「何で空中で動けるのよ…」

なんてぼやいている間もなく銀はそのまま空から空襲してくる。それは落下のスピードも合わさったプラスされた破壊力を秘めリアに襲い掛かる。

「つくう…」

長剣で受け止めたはいいいものの、一撃では終わらない。そのまま地上に足を付けた銀は綺麗な全身を使った動きで大剣で切り付けてくる。最初の一撃で痺れたリアの腕は満足に動いてはくれず防戦一方となってしまう。

しかし、銀の敵は目の前の少女一人ではない。

「おらあっ!」

ランディが脇からスタンハルバートを叩きつける。それを後ろに跳ぶことでかわした銀にノエルとエリイの銃撃の雨が降りかかった。

「ありがとうございます！」

「気にすんな、それより来るぞ！」

銀に視線を戻すと、銃弾の雨を避けながら何やらクナイのようなものを構える。いや、ただのクナイではなく、それに何らかの効果を秘めた札がついていた。

「爆雷符！」

それをエリイに向かって投げつける。それはよける間もなくエリイに向かって一直線に飛んでいく。

「嫌な予感が……アダマンガード！」

その声と同時にエリイの目の前に現れる半透明な薄くありながらも、すべての攻撃から術者を守る鉄壁の壁。札付きクナイはその壁に当たり、爆発することで事なきを得る。

……

……つてか爆発！？あれをもし食らったら……クナイにつけられた札が爆発……つまり刺さった状態のクナイが爆発する……体内で爆発する……？

怖すぎる……エグすぎる……

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！……」

そんなリアの脳内事情はつゆ知らず。銀にロイドが突撃する。それを見たノエルとリアがそれぞれ右横と、左斜め前から同時に銃弾を浴びせて牽制する。

もはや牽制の域を超えている気がしないでもない威力を秘めた魔弾と銃弾が同時に襲い掛かる。しかしそれらを銀は軽々と躲し、大剣でいなす。しかし、それでもすべてを躲すには至らない。

脇腹あたりにノエルのサブマシンガンの銃弾がかすり、わずかに隙が生まれる。

そこにロイドが突っ込む。

「はあっ！」

「っち……」

脇腹にそのまま一発トンファアの先端が入る。しかし、入りが浅かったのか、それをものともせずに大剣でロイドを斬り払い、トンファアをクロスさせてガードしたロイドをものともせずに吹き飛ばす。

「ふん。なかなかやるようだが……」

「ふっふっふ……まだだ、まだ終わらんよ！……ってね」

「何……？」

突如。銀の周りの温度が下がり、突風が吹く。

「ダイヤモンドダスト！」

「エアリアル！」

エリイとティオによる二つのアーツ攻撃。

大量の氷の槍と風の竜巻は見事に銀の身体をとらえ、襲い掛かる。

氷の槍が次々と銀を突き刺そうとし、風の刃が銀の皮膚を切り裂く。それらを躲すことを諦めた銀は大剣の下に隠れるようにして構え、ガードの体勢を取る。

しかし、それでも全方位から迫るアーツを防げるものではない。いくつかが被弾し、決定打にはならなくとも確実にダメージを与える。そのアーツの猛攻が終わり一旦体勢を立て直そうとする銀。しかし…

しかし、まだ攻撃は終わらない。リアの戦術オーブメントが駆動していることに気づいたときにはすでに遅かった。

「いっけええええええええ！クリムゾンレイ！」

使うは火の最上級アーツ。

銀の頭上に現れるは灼熱の炎の塊。

それが火の巨柱となり、術者に危害を加えし者を無慈悲なまでに、完膚なきまでに焼き尽くす。

炎。轟音。爆発。

もうもうと大量の土煙が吹き荒れる。

それを見たロイドが言ってしまった。

「やったか!？」

「ロイドさああああああん!それを言っちゃダメ!生存フラグだからあああ!」

フラグの力なのかどうかは知らないが、突如一同の背後から銀が奇襲。リアはそれをぎりぎりのタイミングで受け止める…が、いきなりで、態勢が悪い。そのまま吹き飛ばされる。

「きゃっ!」

中々に可愛らしい悲鳴を上げ背中を打ちつける。受け身を取ることは成功したので思ったほどのダメージはなく即座に立ち上がるが、結構飛ばされたらしく、リアを吹き飛ばした銀と戸惑いながらも交戦しているロイドたちとは結構距離が離れていた。急いで加勢しようとする…

「フフ…こっちにもいるぞ!」

「だあああ!もう!」

横合いからの声に即座に振り向きざまに長剣を真横に一閃。それを銀も迎え撃ち鏖迫り合いとなる。

突如。ドクンツと音が鳴る。

「アハハハっ…！」

思わず出てしまった笑いを次の瞬間には必死にこらえていた。

それは己の心に住む闇。

それは己の壊れた部分。

それを必死に抑える。

そして、仮面を被る。

次の瞬間にはいつものへらへらとした、気の抜けたような笑みを浮かべていた。

「…あのアーツには結構自信があっただけど…何で生きてるのよ？というか何で三人いるの？兄弟かなにか？」

「フフ…影に攻撃しても何の意味はあるまい」

抽象的なことを…と思いながらもすぐさまピンとくる。

「分け身？」

「ご名答。良く分かったな」

それを聞いたリアは笑みを深め、視線を銀の後ろへと向ける。銀はそれを不思議そうに、そして警戒しながらそれを見つめた。

「私も今使ってるしね。わけ身」

「なっ!？」

おそらくこの戦闘で銀が初めて心から驚愕した瞬間だろう。先ほどリアが自分の後ろに視線を向けた、つまりは今後ろにいるのか？そう思い込んだ銀は慌てて鎧迫り合いを解き、真横に飛んで逃れる。

しかし、焦ったがゆえに隙が生まれる。

そのスキを逃すリアではない。リアは銀の胴体へと長剣を突き刺した。しかし、躲かれてしまう。が、完璧に避けたわけではなく、結構な量の血がばたばたと零れ落ちる。

「っぐ…」

それを見て、そして言った。

「あ、わけ身つかってるのって嘘だから」

「…やってくれたな…」

一応、似たような技を使える事は使えるのだが。
しかしそれでもまだまだ戦えそうな銀を見て、感心したように言う。

「しっかしさすがは東方人街の伝説の凶手ってところね。しかもこの人数相手に手加減してるときた」

「フン。手加減しているのはお互い様だろう?」

「何のこと?…って話してて思ったんだけどあなたは本物?偽物?と言つか男か女かの疑問にまだ答えてもらってないんだけど」

「さあ…どうだろうな!」

やっと返事をしてくれたが答えになっていない。

銀の大剣がリアに迫る。しかしそれなりの量の出血のせい動きが鈍っている。それでも十分早かったがリアにとっては十分簡単にさばけるレベルにまで落ちていた。そんな斬撃を受け止め、その衝撃に逆らわずに後ろに飛ぶ。そして、ロイド達やり合ってる偽銀の背後から不安定な態勢でありながらも銃撃し、完全に不意を突かれた偽の銀が消失する。

そして、最後の一人となった本物だか偽物だか解らない銀を注視しながらすぐさまアーツの詠唱を開始し、リアの身体の周りを白い光で包む。

「これで…ダークマター!」

「こちらにも…電磁ネット!」

リアは銀の身体に圧力をかける重力の塊を出現させ、それで動きの鈍った銀にノエルが静電気を纏ったネットが撃ち込み、短時間だが銀の動きが完全に停止する。

「皆、今のうちに!」

「おっし、任せろ!」

「了解です!」

そういつと同時に、ランディのスタンハルバートに炎が纏わせられ、ティオは魔導杖を変形させる。

「くられ…クリムゾンゲイル！」

スタンハルバートから放たれた炎の衝撃波は狙いたがわず銀に殺到し、大剣によるガードを無理やり貫通させ、思いっきり吹き飛ばす。そして空中で勢いのなすままに吹き飛ばされていく銀を…

「エーテルバスター！」

テイオの魔道杖から放たれる、エネルギーの奔流が狙い撃つ。それが空中で吹き飛ばされている銀を直撃し、大爆発を起こした。

「はあ…はあ…どうだ…!?」
「いや…あれは…」

ランディとティオの渾身の攻撃によりようやく銀に片膝をつかせる。が、そのまま銀はピクリとも動かない。立ったまま死んだという弁慶を思わせる光景だった。

死んだように、動かない。しかし、あれぐらいで死ぬような使い手ではないと半ばリアは確信していた。まさか…

と、とある可能性に思い至ったリアは即座に周りの気配を探る。そして、銀の姿が揺らいだかと思うとふっと消えてしまった。

「なっ…」
「消えた…」

ランディとリアを除いた全員が表情を驚きに染める。当然だ。別に銀じゃなくても目の前で人が何の痕跡も残さずに消えればそりゃあ驚く。あ、よく見たら札が残ってる。痕跡が何もないというわけでもなかった。そして札が残ったということは…

『そちらの二人はなかなか出来るようだな』

そして、少し離れた場所から、銀が虚空より姿を現す。

「い、いつの間に…!?」
「き、気づかなかった…」

「戦闘中に分身だけ残してそこで高見の見物つてわけか。恐ろしく腕が立つようだ…あまりいい趣味とは言えねえな」

ロイドとノエルが呆然とつぶやき、ランディが忌々しげに顔を歪

める。

「ふふ、気に障ったのなら謝罪しよう…しかしリア…といったか。貴様は気づいていたみたいだな」

「…気づいたのは直前だし、もしかしたらつてぐらいの物よ…というか本当に何体分身作る気なのよ？実はあなたも偽物だったりしないわよね？」

「そう思うのか？」

「…まあいいわ。それで、まだやるの？」

ムスツとした不機嫌そのものといった感じの表情を浮かべながら問いかける。なんか全部がこいつの手のひらの上といった感じで全く持って面白くない。手加減していたとはいえそれは相手も同じだし。

「ふ……まあ、いいだろう」

銀はそう言つて大剣をしまう。もはやことを構える気もないらしく、あまりいい雰囲気とは言えない物の、緊迫した空気は霧散すると、ここからは特務支援課の仕事だ。正直顔もよく知らない大スターの事などあまり興味はない。彼女のイリアへの知識はなんかの大スターだということだけである。というかそもそも彼女が銀と戦闘を行ったのは、ただ単にロイドたちと一緒にいたから成り行きでと言っただけなのだ。本来なら闘う理由もない。

「ロイド、私は屋上行ってる。終わったら教えてちょうだい」

返事も聞かずに背を向け、屋上へと続く階段へと足を向ける。気になっていたことをさっさと解決してしまうとしよう。

「うーん…」

と、うなるリアの目の前には大きな鐘が鎮座していた。それを見ながら珍しく難しそうな顔をしている。直感では何となくこれがこの場での異常：上位三属性が働いている原因のような気がする。こういう直観っていうのはなかなか当たったりするし：と思いつつ、とりあえずぐるりと回ってみる。特に変わったものはなし。ただのでかい鐘だ。

「うーん…」

再び唸り、目の前の鐘をじっと見つめる。…鐘、鐘…鐘ってどう使う物？…鳴らすもの。では鳴らすにはどうする？

「叩く…だよな」

そついうわけで、とりあえずノックするような感じでトントんとたく。変化なし。

というわけでふうと深呼吸してから…

「はあっ！」

十分に勢いの乗った回し蹴りを鐘に命中させる。

カーン…カーン…

それと同時に鐘特有の大きく、どこか厳格な印象を与える鐘の音が響く。それをリアはわずかな変化も見逃すまいといった様子でじっと見つめる。そしてその大きな変化はすぐに訪れた。

「ビングゴ…かしらね」

突如鐘が青く発光し始め、彼女のこれまでの短い生涯でありながらも、濃厚な経験がこの鐘から霊的なものを感じとる。

「アーティファクトで間違いはなさそう…かな…」

確固たる証拠があるわけじゃないが、見た目がただの鐘にしか見えない物が光っているのだ。アーティファクトじゃなかったらなんだという話になる。これがこの場の属性を狂わせているのはほぼ間違いないだろう。

「報告だけはしておこうかしら…」

この鐘を見ながら、深刻そうな顔をしてつぶやき…そして不機嫌そうに顔をゆがめる。

「とりあえずこの音を止めよう…」

この鐘かなりうるさい。と言う事でどうやって止めるかを考えてみる。

物理的に止める…一人じゃ無理。三人ぐらいで四方から抑え込みでもしないと無理そう。

「なら…」

薄く目をつむり、意識を集中させる。

「空に住みし空の女神以下略」

そんな、法術と呼ばれる術の詠唱。ふざけた詠唱。しかし、そんな詠唱とは裏腹にリアの手が白く輝く。

「縛」

同時に現れる白き鎖、それが鐘の周りへと出現し、その鎖は鐘を縛るかのように密着する。同時に、鐘を含めた光の鎖が白く発光し始め…

「止まった…わね」

こういう縛るっていうのは女の子にやりたいなあ幼ければなおよし。とかぼやきつつ、この鐘をあんまりむやみに鳴らさないことにしようと心に決める。そして、そろそろもどろっかな。と思いながら下の階へと続く階段を降りようとする…

銀がものすごいスピードですれ違って屋上から地上へスカイダイ

ピングを決行した。

「なんで銀は結社にスカウトされてないのかしら……」

そんな常人の理解の範疇を超える光景を見てもリアは平然としながらそれを見届ける。そして、それを追いかけるように支援課メンバー+ が上ってきた。

「リア！銀はどこに行った！？」

そんなロイドの問いに……

「紐なしバンジーをしてったわよ」

「……はあ！？この高さをか！？」

リアは端的に一言で表し、ランディがありえねーとも言いたげな視線を送る。いやでも、あんたの父親である『闘神』とかにもできそうじゃね？ってなセリフを飲み込む。絶対に怪しまれる。ちなみに私もできるけどね！ってなセリフも飲み込む。絶対に頭がおかしやつとか思われる。

とりあえずリアは呆然としている支援課メンバー+ を見て言った。

「とりあえず……早く帰らない？」

その言葉が、今回の星見の塔の調査終了の言葉となった。

あくまでここにいるメンバーの話だが。

第六話 序章のエピローグ的な？（前書き）

12月21日 一部改編しました。

第六話 序章のエピローグ的な？

星見の塔。数分前まで特務支援課メンバー＋と銀が激闘を繰り広げた場所。そこに、虚空より一人の男が姿を現す。狐をかたどったお面をかぶり、忍び装束と呼ばれる真っ黒な衣装を身にまとっていた。

「……………」

その男はあたりに何の気配もないのを慎重に確認しつつ、あたりを搜索し始める。そして一番最初に目についた巨大な本棚に歩み寄り、その中から適当な本を一冊だけ抜き出した。パラパラとめくり始める。

しかし、その本には全く持って馴染みのない「人が読める物なのこれ」と、言いたくなる文字で書かれている。

「読めぬな……」

まあいい。そう一人ごちながら、その本を棚に戻す。ほかにも床や階段も念入りに調べてみるものの特に仕掛けがあるようには見受けられない。

「ふむ…この塔自体には特に変わったものはない…だが、しかし。上位三属性の影響を受けた魔獣に屋上の鐘…か」

おそらく、あの鐘がここの異常の原因なのだろうと狐面の男は見当をつける。さつき青く光ってたし。と、そろそろ報告に戻るか。そう思い至り、踵を返した時だった。

「隊長さん。月の僧院の調査報告です」

「隊長。お疲れ様です」

と言いながら虚空より現れた二人。声からして片方は男で忍び装束と呼ばれるゼムリア大陸よりも東にある遠い異国の服を身にまとって、猫のお面をかぶっている。もう片方の女性の方は、くの一といった感じの微妙に露出度の高い衣装を身にまとい、同じく仮面をかぶっているのだが…みっしりのお面だった。ミシユラムで好評発売中です。

緊張感を粉々に粉碎する驚異のお面である。

そんな「仮装パーティ？」みたいな感じの二人だが、その二人の男女はその仮面を外し、狐面の男に素顔を晒す。それが彼らにとつてのルールだからだ。

男の方は軽薄そうな笑みを顔に張り付け、遊び人っぽい雰囲気を纏っている。不細工ではない。どちらかと言えばカッコいいと言える顔立ちをしている。

しかし、大抵の人間はこの二人一緒に見て、そのことに気づくことはないだろう。それよりも女性の方が目を引くのだった。

女性の方をまず最初に見て大抵の人間がこう思う。

美しい。

女性はとんでもなく綺麗で整った容姿をしていた。墨を落としたように真っ黒な髪をセミロングにしている。大和撫子と言う表現がピッタリだ。

しかし初対面の人間は次の瞬間には嫌悪の表情を浮かべる、そう思わせるような物があつた。いや、あるのではなく、無いといった方が正しいのか。

その美しい女性は左腕がなかった。左肩から先がないのだ。

しかし、そんな光景を見てもここにいる三人は誰も驚きはしないし、眉毛一本動かすことはない。そんな事は彼らにとっては些細なことだつた。

それどころか隊長と呼ばれた忍び装束で狐面の男はハアつとため息を一つ。

「なあ…みっしいさあ…なんでみっしいのお面なんだ？雰囲気ぶち壊しだろう…なんかその服装も微妙にエロいし」

「主が…『こつちの方がエロ可愛いから！』とこれの着用を義務付けられました…」

「まあ、主がそういうのなら仕方ないが…まあエロいのに越したことはないしな」

「そうつすよね」

と、言いながら二人の男達はみっしい面の女性の胸元や、太もも

やらを堂々と視姦し始める。

「何やってるんですか!!」

どうもみつしい面の女性は恥ずかしいようで顔を真っ赤にしながら胸元を隠す。

「いやいや、あれっすよ。こうして人間の三大欲求である、性欲を刺激し、生存本能を呼び覚ます。それにより、俺らの生存率を高める効果が…」

「そのぐらいにしておけ、猫」

「隊長もめっちゃ見てたっすよね？」

「仕方がないだろう。男の悲しい性だ。というかこういう話題に一番食いつきそうな狸の奴はどうした？あのエロと変態の権化は？」

「…帰る途中に、メイリンという名前の幼女を見かけてしまい…オ―バルカメラを取りに戻って行きました」

「何をやっているんだあいつは…あいつらしくはあるのだが…」

はぁ、とため息をつく。

「…しょうがない。二人とも、報告を聞かせろ」

「了解っす」

「分かりました」

数分後…

「ふむ…ここ、星見の塔とさほど変わったものはなさそうだな…出現した魔獣の種類ぐらいか」

「そうっすね…そして共通点は鐘…」

「十中八九アーティファクトで間違いないかと」

「だろうな」

「どうするッすか？誰にも見つからずに回収ということなら…そうッすね…俺ら「致死軍」が五人ほどいれば何とかなるッすよ」

そっという猫面に対し、狐面はいや…と首を振る。

「そこを判断するのは私たちではなく主だ…しかし、主の性格上そのようなことにはならんだろう」

「それもそうッすね…主だったら…まあ、持ち帰ってまでの興味は示そうとしないと思うッす」

「でしょうね…」

「そっというわけだ…下がっていいぞ」

「了解ッす…あ、いや。そっいえば狸の奴が面白いことを言ッてたッすよ」

「…なんだ、可愛い幼子でも見つけたか？」

面白いことと言ッて真ッ先にそんな単語が出てくる隊長の姿にみッしい面の女性は頭が痛くなッてきた。気持ちには分からないでもないが。

「いえ、珍しくまともそうでしたよ。クロイス家の暗部みたいなのッすね」

「クロイス家…？ああ、IBCの社長だッたか」

「ええ。生意気にもシリアスな表情を浮かべッつッ《人の欲とは恐ろしいものです…》とか言ッてッたッす」

「あいつがシリアスな表情だと…馬鹿なッ！？」

狐はそんなありえない報告に驚愕する。ありえない。何があり得ないッって太陽が東から上ッてくるがごときの一大事だ。天地が裂ける。

「ドッペルゲンガーである可能性は？もしくは猫。お前何らかの幻術にかかっていないだろうな？」

「…隊長。信じられないのは分かりますが…事実です」

比較的常識人であるみつしい面の声にようやく納得する。

「…正直信じられぬが…後で確認しておこう」

「そうした方がよろしいかと。たぶん今頃、東通りで盗撮している頃合いかと思います」

「はあ……」

ため息をつきなくなる気持ちはよく分かる。

「…下がっていいぞ。リア様…じゃなかったか。アスノリア様には私から報告しておく」

「分かりました。お疲れ様です」

「お疲れさます」

みつしい面と猫面の二人は虚空へと消えた。それを見届けてから隊長と呼ばれし男は、はあ…と再びため息をつく。

「…帰るか」

そして、狐面の彼も…虚空に消えた。

第七話 この変態がああああああ！！（前書き）

前回の話の後半あたりを改編しました。

： 見ないと何この急展開！？ってな感じになるかもしれないので一度目を通してもらえると。

「んでもってブルブラン…何しに来たのよ…」

その白衣の男…怪盗紳士ブルブランを彼女は不機嫌そのものな様子で睨む。折角の一人の休憩時間を邪魔されたのだ。ムカつく。

「ふふ…そう睨まないでくれたまえ」

「女の子の部屋に勝手に侵入＆下着姿見ておいて反省の色なし？」

「残念ながら君の半裸に興味はないのでね」

「死ねよ。頼むから死んでくれよ。怪盗紳士ならぬ変態紳士と呼んでやろうか？」

めっちゃ不機嫌な顔を浮かべつつ乱暴な口調でしゃべっているリアは、現在はちゃんと上が和服で、下はミニスカとニーソックスという普段通りの格好をしている。ったく…と悪態をつきながら椅子に座り、女の敵を睨む。

「まったく…せつかくの休みだつてのに…」

「そんな君に申し訳ないのだが、仕事だ」

「…帰れ。今すぐ。刹那的な速さでとっとと早く秒速で光の速度で帰れ」

なんで休日返上で働かなければならん。ただでさえ機嫌が悪いのに。

「まずは話だけでも聞いてはくれないか？君の前回の報告に関する
ことなのだよ」

「まったく…前回の報告っていうと…クロイス家の？」

そんな状態でも話を聞くとそこを見るとそこそこ人がいいのかも
しれない。

そんな彼女の身喰らう蛇での役割は大抵が頭脳労働になっている。
使徒の立てた計画の細かいところを詰めたり、外部との交渉をした
り、軍備に関してとか…そこらの面倒なことを一身で引き受けてい
る。

そこでその副産物として彼女が念のために放っておいた諜報員が
かなり驚愕の情報をよこしてきたのだ。

その内容がまた…すごいよ？クロイス家の暗部みたいなものなの
だが…人の欲望ってのは怖いものだと思わせるものだった。

「ああ。それで間違いない」

「…はあ」

深々とため息を一つ。そして面倒ではあったし、こいつの憎たら
しい笑みもム力つくものの『どうせ暇だしいつか』と自分を納得さ
せる。そして、頭を切り替え、いったん先ほどの事は頭の隅に追
いやる。

「まあ、いいわ。聞くだけ聞いてあげる。無理そうだったら拒否
から」

「承知した。執行者はそもそも行動を制限されることはない自由な
身分。そこは君の自由だ」

「はいはい…」

そう言って両者は向かい合う形で木製のオンボロ椅子に座った。

そして、数十分後：

「つまり、協力を申し出ようということになったって事？」

「要約するとそうなるな。あの計画はわれら身喰らう蛇にとっても役に立つ内容なのだよ。特に博士が興味を示していたな」

と言うことらしかった。ちなみに博士とは身喰らう蛇の技術部門である《十三工房》を統括している、使徒だ。アングス

そして、リアはもはやすっかり冷めてしまった安物のインスタントの紅茶を口に含み、数秒間だけ黙考する。

「行けそうか？」

「余裕でしょうね。勝利はすでにわれの手の上にある」

そう言つて首をすくめ、立ち上がる。

「さて…私はさつさとこの案件を終わらせてくるけど…ブルブランはこれからどうするの？またヨシユエスへの嫌がらせ？」

「嫌がらせとはんでもない。ちよつとした戯れだ」

「あつそ…」

あれが？何か貴重な芸術品を隠して、怪盗Bと言う名で暗号を送る。そして、それを必死に探している様子を遠くから眺める。嫌がらせじゃなかったら何？

「それに今回のターゲットは特務支援課という警察の諸君だ、まだ稚拙だが大いなる輝きを秘めている宝石といったところか」

「ああ…あれね」

「知り合いなのか？」

「まね。カンパネルラに紹介されたんだけど。中々面白い人材がそろってるわよ」

それを最後にこの部屋の出口の扉へと手を掛ける。

「そんじゃ。ばいばい」

歩いて外へと出て行つた。

彼女：マリアベルはIBCビルの執務室にて、IBC関連の雑務に励んでいた。要するに父親であり、IBCの社長でもあるティーターの手伝いなのだ。

ただ、国際的な銀行と言うこともありその量は手伝いとはいえ馬鹿にならない。結構きつい量がある。

そんな時だった。執務室に備え付けられている電話が音を響かせ、誰かが電話をかけてきたことを持ち主に伝える。

「だれかしら…？」

そう呟きながら、受話器を取る。そして、マリアベルが言葉を発

する前に、彼女を凍りつかせる一声を不意打ちで放ってきた。

「初めまして、マリアベル・クロイスさん。零の至宝……だったっけ、順調に進んでる？」

思考が数秒間停止した。

なぜ知っている？ いや、そもそも誰？ なぜこんなことを電話で話してくる？ 何が目的？

なぜ、なぜ、なぜ。その単語だけが脳を支配しかける。

しかし、わずか数秒で混乱を収める。マリアベルは手伝いとはいえ、若くしてIBCの仕事のを任されているのだ。そのぐらいの不意打ちで我を忘れるような可愛げのある性格はしていない。

「……どなたか知りませんがあまり礼儀がなっていない方の方ですわね」

「おろ……何で？」

「まずは用件より自分が名乗るのが先でしょう？」

「……なるほど……いやーごめん、ごめん。確かにそのとおりね」

あははーと思わず気の抜けるようなのんきな笑い声を響かせてから、再び言葉を発する。

「改めまして、私は《身喰らう蛇》が執行者NO14 表裏比興アスノリア 以後よろしく」

その単語に驚愕する。

しかし、それと同時に、脳の片隅ではなるほどと思っている自分がいた。かつて、リベールを大混乱に陥れた謎の結社である『身喰らう蛇』それほどの巨大な組織ならこちらがやっていることをつか

むことぐらいはできるのかもしれない。そう思えるからだ。

そして、マリアベルは努めて冷静な声をだしながら応じる。

「身喰らう蛇…ですか。何の用ですの？」

「ふふ…単刀直入に行かせてもらつと…あなたたちの計画に協力しようかと思つてね。どう？」

「…いきなりそのように言われて、いい返事がもらえんと思ひまして？」

「思つてゐるわよ？ 問答無用で拒否るのなら、遊撃士あたりにばらしね」

「……………」

完全な脅迫だった。思わず沈黙してしまふマリアベルに対し、アスノリアと名乗つた少女は続ける。

「別にそんな無理難題を出そうつて思つてゐるわけじゃないのよ？ それどころかこちらからは特に要求はなし」

「どういうことですか？」

「あなたたちの計画は身喰らう蛇にとつても興味深いのよ。だからこちらが申し出るのは貴方たちの計画が無事成功するようにするための協力。正直なところ身喰らう蛇の技術はエプスタイン財団なんか目じゃないぐらいに進んでゐるわよ」

面白い話には裏がある。そんな諺が脳裏に浮かぶ。

マリアベルはそのことを完全に信用するほど人が良くはない。ただ、身喰らう蛇の技術力と言うのは魅力的だった。マリアベルの進める計画に大きな助けとなるのは明らかなのだ。だからこう答えた。

「…もう少し、待つていたたけませんこと？ 残念ながら私だけで進めている計画ではありませんので」

「ん、OK。どうせ受けるにしても後日ちゃんと話し合わないといけないものね。日時はそっちが好きなように決めて。場所は…直接そっちに行っても？」

「…承知しましたわ。では、クロスベル生誕祭初日の午前十時に、IBCビルで」

「委細承知…ってね。それじゃあ、ばいばい。マリアベルさん」

それを最後に、電話は切れた。

マリアベルは薄く目をつむり、何かを考え込んでいるかのように数分間動くことはなかった。

やがて、再び受話器を手に取り、どこかに連絡を取り始めた。

第八話 IN遊撃士協会（前書き）

最近家族にパソコン占領される…

第八話 IN遊撃士協会

「というわけなのですが…お願いできます?」

「ええ、もちろんよ。ただ、緊急度の低い依頼だから後回しにされちゃうかもしれないけれど…」

「あ、はい。構いません。そこまで急ぎでもありませんので」

遊撃士協会。それを簡潔に一言で言い表せばぶっちゃけ何でも屋である。

そのクロスベル支部に受付のミシェルと話しているリアの姿があった。

ただ、普段の彼女を知る者からすればありえないくらいに柔らかい笑みをうかべ、どこぞの令嬢と言われればあっさり納得してしまうような雰囲気身をまとうていたが。

「なんかごめんなさいね。他にも依頼が多いのよ。たぶん生誕祭が終わった後になってしまっただけ…」

そう。今日は生誕祭初日だった。生誕祭ってのはそのまま祭りだ。クロスベル全体でクロスベル誕生…えーと…何年だっけ? まあいいや。何周年かを記念したから、数日かけてドンチャン騒ぎを起こす。たぶん今日がクロスベルが誕生して何年とか意識している人間はいないだろうけど。大半の人間にとってはただ騒ぎたいだけに違いはない。少なくともリアにとってはそうである。

「そうみたいです…他の国もいろいろ見てきましたけど、これだけの数の依頼が同時に張られてるのって初めて見ましたよ。お疲れ様です」

と、穏やかにいいながら木製掲示板の樹の部分が見えないぐらいに張り付けられまくっている依頼の数々を見る。すげえ…なんか壮観ですらある。

「そういえば…警察での特務支援課ってところでも似たようなことやってるらしいですけど、役に立ってるのですか？」

「うーん…最初は頼りなかったし、それは今でもなんだけど…まあ、将来に期待ってところかしら」

「あらあら…」

等というたわいもない雑談をしていた。さて、あまり長居してエステル＆ヨシユアに見つかるのもあまり…いや、面白そうではあるけど…まあ、どっち道忙しいらしいし会えないか。などと思いつつ。

「それでは忙しいようなので。私はこれで」

「ええ。困ったことがあったらいつでもどうぞ」

と互いに社交辞令を交わして立ち去ろうとしたところで…

「ミシエルさん！ただ今戻りましたー！あれ、お客さん？」

「ただ今戻りました」

エステルとヨシユアが入ってきたところでリアは思ったという。

これもフラグだろうか…と。

そして、エステルはそのお客さんの姿を確認した途端…

「ええええええええっ!？」

驚きの声を上げた。

「ちょ、ちよつとあんた！なんているのよ！」

「あら、エステルさんにヨシユアさん。お元気そうで何より。お変わりありませんか？」

「どうしたのその口調？変よ？」

「うるっさいわね。たまには私だっておしとやかな女の子を演じてみたくなることもあるの！」

瞬時に人当たりのよさそうな笑みを消して仏頂面になる。演技だったらしく、瞬時に雰囲気が変わる。女って怖い。

「どうして君がここに？」

そんなエステルに反してヨシユアは冷静だった。僅かに目をそばめ、「明らかに警戒しています」と言った雰囲気醸し出す。

「実は…ヨシユアきゅんに会いたくなっちゃって…きちゃった　テへ」

「……………」

「ごめんなさい」

一瞬土下座しようかと思ったぐらいの絶対零度的な視線に撃沈。
ぐすん…みんな冷たい…

「ひどい…ちよつとした冗談じゃないか…」

「話す気はない。とみていいですか？」

「…女の子が落ち込んでるのにその反応はないんじゃないの？」

はぁ…とこれ見よがし気にため息をつく、置いてけぼりをくら

っていたミシエルが会話に混ざってくる。

「ヨシユアにエステル？どうしたのよさっきから？」

ヨシユアはその質問にどう答えたものと数秒間考え込んだもののやがてぼつりと一言。

「…アスノリア・ルアルディ。と言えば分りますか？」
「っ！？」

ミシエルの顔が驚愕の表情へと変わり、次の瞬間には敵意の視線をリアに向ける。

「執行者NO、14『表裏比興』…」

「まあ、そうなんだけどさ…」

三人同時に敵意を向けられて居心地悪い…いやまあ、仕方がない気もするけど…理性ではわかってても感情では追いつけるものじゃない。

「…とりあえず。一旦落ちついて話さない？」

「というかヨシユア君なら私がクロスベルにいることぐらい知ってたんでしょ？ 隠密行動に感してはどの執行者よりも上って聞いているし。少なくとも私よりは格段に上のはず」

「確かに知ってはいた。ただ、部下にクロスベルの情勢を調べさせているだけで特に怪しい動きをしているわけでもなかったから、取り合えず様子見をしていた」

「でも、ここ遊撃士協会来た…つまりは行動を起こしたように見える。つてところかしら？」

「…そうだ」

遊撃士協会二階にある談話室のような場所。そこにリアとヨシユアとエステルがいた。ミシエルは受付の仕事を蜂起するわけにもいかないでここにはいない。口を開いたのはエステルだった。

「それで、結社はまたここで何をしようとしているの！」

「いやあ…たぶんだれも来てな…そういえばブルブランが来てたっけ…まあ、来てたとしても私みたいに個人の用事だと思う」

「っへ…？ そ、それじゃあ、なんであんたはここにいるのよ！？」

肩透かしを食らったような表情をエステルはうかべる。ついでにリアはブルブランの名前を思い出した瞬間にしかめっ面になる。

「里帰り。遊撃士協会に来たのはただの依頼よ。墓参りに使う花を集めてきて欲しくて」

「…本当に？」

「ここ生まれ故郷だし…昔はここまで発展してなかったんだけどねえ」

「なんかおばさん臭いわよ?」

「殺すぞゴラ」

エステルに殺気立った視線を向けたとたん、ヨシユアに殺気立った視線を向けられたのでゆっくりと殺気を収め、エステルがまとめるように言った。

「でもまあ、そういうことなら別に敵対する必要は…」

「その話が全部本当ならね」

しかし、ヨシユアが遮った。それを見てやつぱりいいコンビだなとリアは感心する。エステルは人がよすぎる。それゆえに誰とでもすぐに仲良くなれる。しかし、だからこそなのか、人を疑うということをしていない。それは時に命取りとなりかねない一長一短な性格だ。それを補っているのがヨシユアだ。

「ちよつとヨシユア…」

「そもそも、ただの花集めというのなら自分でもできるはずだ。わざわざ遊撃士協会を頼る必要があるとは思えない。…『風の剣聖』といういくらあなたでも敵わないような敵がいるというのに」

「私は遊撃士協会を敵に回すつもりはないわよ。アリオス・マクレインだっけ?一度彼の戦績見てみたけど正面から戦い合えばあまり勝てる気はしないわね」

あくまで正面からやったら…だが。大抵の人間は倒そうと思えばいくらでも方法はあるものだ。

例を挙げるとすれば「そういえば…話は変わりますがあなたには娘さんがいましたよね?」「な、なぜそれを!?!」みたいな感じな

のがあげられる。あまりやりたくないが。胸糞悪いし。

ヨシユアが話を続ける。

「そうでなくとも身喰らう蛇は遊撃士協会で最優先でマークされると言っても過言ではない。それは分かっているはずだ」

確かに。とリアは肯定する。善良な市民に仇なす犯罪組織と善良な市民の味方。水と油といった関係だ。さらにリベール一件では目立ち過ぎた。あれ以来結社の動きをつかもうとし始めた組織は多い。

「ヨシユア君の言うとおり簡単には信用できないわよね。ただ、私としては別に信用されなくても問題はないわ。私も人を信用する気はないもの」

「なっ……」

「だけど、私としては今は執行者として行動したくない。信じるか信じないかは勝手だけだね」

とだけ言って、沈黙している若き二人の遊撃士を見やりつつ、ついさつきマリアベルさんのところで活動してきた事を思い出した。まあいいや。したくないと思ってるのは本当だし。うわ、我ながら酷い屁理屈。

そして、そうそう。と話題を変えるように言う。

「あのさ。レンの居場所知らない？」

「……なんでそんなことを？」

「あのリベールでの事件の後、結社にも帰ってこないのよね。そこで漆黒の牙とよばれた隠密行動の達人たるヨシユア君なら知ってるかなあって」

「あなたの部下にでも調べさせたらいい。そういうのは得意分野なはずだ」

「…あの子って天才だから」

調べて見たものの解らなかったのだ。わかったことといえばクロスベルにいる…かも？という信憑性もなくそつたれもない情報だけ。

「なんであなたがそんなこと知りたいのよ？」

「私にとってもレンちゃんは大事な子なのよね。可愛いし。抱き心地最高」

「だったらなんであんなことをさせるのを止めさせないのよ！」

あんなこと…？ああ、執行者としての活動か。それに思いあたったりアが言う。

「…私はあの子の投げ所の一つぐらいはなれる。一緒にいてあげることとはできる。でもあの子の闇を取り除く事はできない」

ポツリと。どことなく寂しそうに言う。

「え…？」

「結社にかかわる人間は心に大なり小なり何かしらの闇を抱えてる。それは過去だったり。自分の本質だったりと千差万別なのだけど。その中でも、レンちゃんの闇はとりわけ深い。私みたいな『壊れてる人間』にはその闇を取り除くことなどできないわよ」

自らを壊れた人間と称し自虐的に小さく笑う。と、そんな表情もすぐさま消え、気の抜けた笑顔に戻る。

「と、そんな話はどうでもいいのよ、それで、知らない？」

「…ローゼンベルク工房。そこにいる可能性が高いつて」

「エステル！？」

リアの質問にあっさりとエステルは答える。それがリアとしても
以外だったらしく珍しくきょとした顔になる。

「いいの？」

「あたしにはあんたが抱えてる闇とやらは良く分からないし、どう
して壊れた人間なんて言ってるのかもわからない。ただ、レンを思
う気持ちは本物だと思った。だからよ」

笑顔でそう答えるエステルを珍獣を見るような目で見る。

「…そつか。何というか…まぶしいわね。ヨシユア君が惚れるのも
わかるかも」

「…僕はまだあなたを信用したわけじゃありませんから」
「解ってるわよ。それじゃ、私はそろそろいくわね」

それだけ言つて、ヨシユアとエステルに背を向ける。そして、下
に降りる階段に足を掛けようとしたところで振り返った。

「二人ともありがとう」

今度は演技でも何でもなく、本心から柔和に微笑んだ。

第九話 続いてINローゼンベルク工房（前書き）

今まで一番長い地の文を書いた気がする…書いた気がするっていうか書いたの結構前だけど。

第九話 続いてINローゼンベルク工房

「ここの先に…灯台下暗しってやつね」

ローゼンベルク工房。十三工房の一つにして、主に人形を制作している。ただ、一口に人形と言っても鑑賞用のまるで生きているかのように精密な人形に始まり、人形兵器やらパネルマテルというガンダム並みの大きさを誇るもはや人形の領分を超えた気がしなくもない、人形と言っていいのかわからない人形という180°方向性の違う人形まで千差万別だ。

…というかあれを人形と呼んでいいのだろうか。一つのそこらにある町ぐらいなら軽く壊滅させるぐらいの火力を持つあれを人形扱いしていいんだろうか？

それはさておきこれでも色々あってここの主人とは知り合いだ。マスターというわけでさっそく門の前に立ち、虚空に向かって声を出す。するとどこからともなくおなじみの老人の声が機械越しに響く。

「ヨルグのおじさん。いるー？」

「…なんのようだ」

「遊びに来た」

「さっさと帰れ。貴様の戯言に構ってる暇はない」

「ひどい!？」

「っち…」

一つ舌打ちし、その直後に門が開く。その数秒後に一体のかわいらしい、リアにとっておなじみの子供ぐらいの大きさの人形が奥の扉からトコトコと歩いてきた。

「おおー久しぶり。元気だった？あの意地悪なおじいさんにいじめ

られてない？」

もちろん人形なので返事を返すことはなく、華麗にスルーしてからぺこりと一礼する。そして再び屋敷の中へと戻っていった。べつにあいさつしに來ただけとかいうわけではなく、ついてこいという意味だ。

「元気にしてるかな」

楽しげにそうつぶやいてから小さな人形の背を追っていった。

ちなみにこの屋敷の地下にあるとんでもなく長い迷路を踏破していくたびに、少しずつテンションが下がってきたことは言うまでもない。

「おーっす。じいさん。ギックリ腰とか大丈夫？…というかなんなのあの長い迷路？馬鹿なの？死ぬの？」

「…それで何の用だ、じゃじゃ馬娘」

「だから遊びに来ただけ。っていうか本当にレンが来てるのね」

軽い罵倒を織り交ぜたあいさつをしながら中に入る。一番最初に目についたのが白髪の老人。ヨルグだった。老人なのだがぴんぴんしております。背筋がピンとしております。

ついで目についたのがゴルディアス級の人形。パテル＝マテルだった。レンの所有している巨大人形だ。そちらにもおーっすと声をかけてみると、返事をするかのように目にあたる部分を数回点滅させる。

「うんうん。…なんて言ってるんだろ？」

残念ながらレンじゃないのでパテマテの言葉はわかりません。ちくしょう…

「馬鹿かお前は」

「黙れ、よぼよぼのジジイ。略してヨボジイ。そんでレンは？」

「朝早くにクロスベルに出かけたぞ。残念だったな。バカ娘」

「あらら。…ま、いいわ。枯れた老人で我慢しましょう」

「ふん。気に入らんのならさっさと出てけ」

「ふっふっふ…残念ながらレンが返ってくるまで帰る気はなし…お、導力ネット発見」

いつもの互いに悪口のようなあいさつを交わしているといくつかのディスプレイを持った一つの端末を発見する。

「これどうしたの？根っからのアナログ派っぽいあなたが？」

「第六柱の奴が勝手ににおいてったんじゃない」

「博士から…？よく壊さなかったわね。あなただったら速攻で破壊しそうなものだけど。ついに仲直りしたの？」

「壊そうとはした。だが、最近はレンがいろいろやつとるみたいじやな…それに奴と仲が良かったことなど一度としてない」

「ふーん…」

その電源を勝手に入れ、キーボードをカタカタと操作し始める。

「…へえ…これが噂の導力ネットか…星振コードに比べればやっぱり性能は落ちるみたいだけど」

適当にネット上をぶらついてみる。これをレンがやったらすごいことになりそう…IBCビルの端末にハッキングするとかいとも簡単にこなしそうで怖い。ちなみにほかの一般の端末ならまだしもIBC等の会社へのハッキングなどリアには無理だ。

「…それで、何しに来たのだ？」

「だから遊びにきたんだって。ボケた？」

「レンと会って。何をするつもりだ？」

いつになく真面目な声だった。へえ…と思いながらもからかうような声音で告げる。

「大事なんだ。レンの事」

「…それで。結社に連れ戻しにでも来たか？」

「それは本人の決めることでしょ？まあ、結社にあまり関わっては欲しくないわよそりゃ。でも、戻ってきてくれないのも寂しいのよね…」

「めんどくさいやつだ」

「この年で微妙にツンデレの奴に言われたくないわね」

ガッ！

胸ぐらをつかみあう音。

「切れるわよ？そろそろ」

「ふん。これだから最近の若いのは…堪忍が足りん」

「あらあら…ずいぶん年寄り臭いセリフで…」

「貴様の目は節穴か？これのどこが年寄りに見える。貴様こそその髪はなんだ？白髪だらけではないか」

「見る目がないわねクソジジイ。いいでしょう。これでも卑怯な手を使わせたら右に出るものはいないと皮肉交じりに称された『表裏比興』の実力を見るがいいわ！」

「ならば、こちらは最新型の人形兵器で…」

と、一触即発という雰囲気のところでのこの部屋の扉が開く。

「ただいま。おじいさん…っと…え…」

「レン！！」

入ってきた人間を見たたん、ヨルグの事はもう眼中にないといった感じで入ってきた少女…レンに抱きつく。

「久しぶりーレン。元気だった？風邪ひいてない？あ、身長少し伸びた？」

「ちよつとリア…苦しいわよ…」

「おっと…ごめん、ごめん」

あはは…と笑いながらレンから距離を取る。

白いゴスロリと呼ばれる服に紫の髪をセミロングにしている、可愛らしい顔立ち。まだ子供ではあるのでスタイルは残念だがあと十年ぐらいすればさぞかしモテるだろうと思わせる。というか一部の

人間からは今だからこそ付き合いたいと思う人間も多々いるだろう。
…そうだろう？画面の前の諸君。

「それで、何しに来たの？」

「レンならわかるんじゃないの？」

「遊びに来ただけでしょ」

「その通り。いやーそのヨボジイと違って賢いわね」レンは

「黙れ。白髪」

ガッ！

胸ぐらをつかみあう音。

「相変わらず仲がいいのね」

「ふふん。そうでしょ」

「ふん……」

リアは特に否定することもなく笑顔でスルーする。それを見て何が面白いのかレンはクスクスと笑う。

「でも、驚いたわ。ここにリアが来るなんて。どうしてここがわかったの？」

「へえ…レンでもわからないことがあるんだ」

「私の知らないこと以外は全部知ってるわ」

「ふふ…違いはないわね。実はヨシユア君が教えてくれたのよ」
「……………」

それを聞いた途端にレンはうつむき、口を閉ざす。

「探してたわよ。レンの事」

「……………」

「会に行けばいいのに」

「知らないわよ。そんなの」

「あっそ」

ぽつりと呟くレンを見ながら、前回出会ったエステルのを思い出す。…彼女ならレンの事をなんとかできるんじゃないか。そんな確信にも似た思いがあった。

不思議なものだと思う。エステルとはリベールで関わったとはいえ敵として、しかも少しだけだ。まともにしゃべったのは前回の初めてといえる。なのに、リアは何とかできるんじゃないかと思えてきていた。思わせる魅力が彼女にあった。

なんか嫉妬しちやいそう…と思いながらも、ガサゴソと肩に下げていたポシエットから彼女は一枚の樹の板…将棋盤と駒を取りだす。

「とりあえず、レン！今度こそリベンジを果たす！」

今回こそ全敗記録をストップさせてやる！

「…ふふ」

「なん…だと…」

互いに木製の円形のテーブルにつき、二人で将棋をやりまくった。それはもうやりまくった。全敗した。今二人の眼前には将棋盤が置かれおり、リアの陣地はレンの駒で埋め尽くされている。

「必死に穴熊とかいう戦法を覚えてきたというのに…だああ！勝てない！イカサマじゃないわよね！？」

「将棋でイカサマってできるのかしら？」

「思わないけど…ええいもう一回だもう一回！次レンは飛車角抜き！」

数分後…

「…なんで…勝てない…」

「リアも懲りないわね…ちょっと尊敬するわ」

「ちくしょう…それじゃあ、今度はレンは王と歩だけ！それ以外全部抜け！」

「…いや、それはさすがに…」

数分後…

「……………」

「私にもわからない事ってあるのね…まさか勝てるとはおもなかったわ…というかなんで勝てたのかしら？」

「だああああ！もうやめやめ！」

うがああああと目の前の番の駒をめちやくちゃにかき回し、ソファにどすつと体をつずめる。

「123敗0勝…」

「うわああああああああん」

ぼつりとレンが呟いた自らの今までの戦績にソファの上でのたちまわるリア。ヨルグはといえばそれを忌まわしげに見て舌打ちする。

「うるさいわ。静かにしろ！」

「ええい！そんな冷たい性格だからアンタはこの年でも独り身なんだよ！」

そう怒鳴り、ハア…とため息を付き時計を確認すると、よっこらせとソファから立ち上がる。

「…今日はそろそろ帰る。そんじゃね。レン。あとジジイ」

「うふふ…また来て頂戴。なかなか楽しかったわ」

「そうするわ。…あ、よかったら今度はうちに来る？場所は…」

「旧市街のロータスハイツって言うマンションでしょ？」

「…言うまでもなかったわね。そんじゃまた今度。気が向いたら来なよ」

ひらひらと手を振りながら、この家の住人達に背を向けると部屋の外からおなじみの人形が入室して来る。

「案内よろしく」

そう笑顔で言う。すると人形はやはりそれを華麗にスルーしてペこりとお辞儀した。

「ふん。やっと帰ったか」

「その割にどこか楽しそうに見えたけど」

「気のせいだ」

とだけ言っただけでヨルグは再び机に座り、何らかの設計図を描いていた。それを見てレンはくすくすと笑う。

ヨルグはいわゆる人嫌いだ。過去に何があつたかは知らないが人を寄せ付けることはない。この人里離れた場所に住んでいることからも明白だ。だから気に入らない相手というか、大抵の人間は屋敷に入ることすらかなわない。

そしてレンはそんな気難しい老人と普通に出会う変わった執行者の事を思いうかべる。

彼女：リアが執行者になったのはヨシユアが結社から抜け、レンが執行者になる前：四年ほど前の事だ。

リアはレンの事をたいそう気に入ってるらしく、よく気にかけており、レンもリアにはレーヴェと言うもはやこの世にはいない執行者と同様に懐いていた。

彼女の二つ名は『表裏比興』

意味は『表裏のある油断のならない人物』だ。最近では単なる卑怯者という意味でも使われるが、おそらくリアにつけられている意味としては前者だろう。

実際、彼女になめてかかるとひどい目に会う。結社に関わろうとする人間はほぼ確実と言っていいほどに彼女を通してふるいにかけるのだが、それがいい年した男だった場合は死ぬよりひどい目に会う。…女性の場合はやんわりと追い返しているみたいだが。

しかも、普段からアホっぽいことを言って、「こいつ大したことないな」と思わせるように仕向けているのだから余計にたちが悪い。

彼女の普段の姿は仮面だ。敵を油断させ、敵を仕留めるための。分厚すぎる仮面。

そして、それは口で言うほど簡単ではない。

例えばだ。普段内気な人間がいたとする。そんな人間が明るい人間という仮面をかぶり、それをずっと被り続けることは可能だろうか？喋りたくもないのに喋り。笑いたくもないのに笑うということが出来るのだろうか。

いや、大抵の人間には出来るだろう。しかし、それをどの人間にも見せず永久に、誰にも愚痴ることはなく、独りきりであろうとも本来の自分を見せない。そんなことができる人間が果たしているのだろうか？

だが、リアはそれを実行している。昔の彼女を知るとある使徒アングスがそう話しているのをレンは聞いたことがあった。

どんな人生を歩めばそんなことができるのだろうか。

「……………」

「レン？どうした」

「ふふ、なんでもないわ…あ、いや…」

珍しく歯切れの悪いレンの返事にヨルグは設計図を描いている手

を止める。

「おじいさんは、リアが昔何をやってたのか知っているの？」

「さあな、聞いたこともないし、聞きたいと思わん。だが執行者という立場である以上何かはあるのだろうがな」

レンも同感ではあった。自分自身もそうだから。

「ソバカス君とでも遊ぼうかしら」

モヤモヤしてきた頭を切り替えるかのように、レンは導力ネットにつないでいる端末の電源を入れた。

第十話 旧市街の不良チーム達

「おお…おいしいわねこれ」

「おお、嬢ちゃんにはわかるかこれが！いやはや最近の女性客は汁が跳ねるとかなんとか言いやがる奴が多くてよ…」

リアは湾岸区にあるラーメン屋で麺をすすっていた。湾岸区とはミシユラムと言うテーマパーク行きの水上バスもある場所だ。

普段はそれなりに人も多いのだが、今は昼時をちよい過ぎたあたりの時間でちょうど客も少なくすんなりと座れた。

そのまま屋台のおっちゃん和雑談しながら最後につゆを豪快に飲み干す。

「ふう…ごちそう様！おいしかったわ」

「ガハハ！こつちもそんだけおいしそうに食ってくれと作り甲斐があるってな。また来てくれよ！」

「ん、また来るわね」

ひらひらと手を振りながら、その場を後にしようとして…

旧市街の誇る二つの不良集団：サーベルパイパーとテストメンツが遠目に喧嘩しているのが見えた。

「ん？なんだありゃあ？」

同様に不良の集団に気づいた屋台のおっちゃんが疑問符を上げる。まあ、この不良たちは旧市街を主な戦場としているので別の地区に住んでいる人間にはなじみがないのだろう。

そして我らが主人公。リアはというと…

「おお！喧嘩じゃないか！」

野次馬根性を働かせ飛び出していった。

「おーそこだそこーやれやれー！」

リアは最前列で思いっきり喧嘩を煽っていた。いや、喧嘩というより、二つの不良集団による勝ち抜きタイマン戦。その効果が最初は戸惑い気味に見ていた野次馬も祭りの余興のような感じで完全に見世物として見ていた。

少し視線をめぐらせばどちらが勝つかを賭けている人間も多数。

「おらっ、青坊主！気合入れてかかってこいやあ！」

「言われるまでもないさ。行くぞ！」

さほど戦闘のレベルは高いわけでもないが素人目からすれば十分見て楽しめるレベルではあった。というか不良にしてはレベル高くない？とリアの目から見て思う。

「リア！これは何事だ？」

そんな時に後ろから自分の事をよぶ声がする。声のした方を向くとそこには特務支援課のメンバーが。

「おっと、これは支援課メンバーも諸君。ちよりーっす」

「ちよ、ちより？」

「解らないならスルーしていいわよ」

エリイの疑問を解消せずに話を続ける。

「これを止めに来た…ってところ？」

「ああ、さっきワジとヴァルトが喧嘩かしてるって通報が…」

と、一旦言葉を切り周りを見渡す。

「何かもう完全に見世物だな」

「でしょ。旧市街きつての不良集団による勝ち抜きタイマン戦。なかなかいい勝負になってるわね。止めるの？」

「ああ、いくらなんでも場所が悪いしな…」

「ええー…ぶーぶーぶー」

「あのな…」

ロイドの判断に、思わずブーイングする。不満たらたらであったものの、善良な一般市民（笑）としては警察に逆らう気に漏れなかったので諦めて帰るか。と、思ったところでその場に大きな変化が

起こる。

「ちよつとちよつと、あなたたち何をしているのよ？」

そこにいたのはつい昨日会ったばかりの若い遊撃士。ヨシユア&エステル：なんかもう長いしヨシユエスで行こう。うん。というわけでヨシユエスが喧嘩している集団に割って入る。

「全く、連絡を受けて見に来てみればゾロゾロと……あなたたち旧市街のサーベルバイパーとテストメンツね？ 喧嘩は終わり。とつとと解散しなさいよね！」

「なんだあ。てめえらは？」

サーベルバイパーのリーダー格らしき人物が不機嫌そうな声を上げる。名をヴァルドとか言っていたはずだ。

そのヴァルドはせっかく盛り上がってきた喧嘩に水を差されたのが気に食わないらしく、若干苛立った声を上げる。

「遊撃士協会に所属する者です。あなた方が喧嘩をしていると連絡を受けて、仲裁にやってきました」

「遊撃士だとお？」

「ヨシユア・ブライトにエステル・ブライトか。雑誌で何度か見かけたね」

というかあのリベールでの事件が解決してから一か月近くはほとんどの雑誌に映ってた気がする。「リベールを救った若き英雄」とかそんな感じの見出しで。

そんなことを思い出している間も話は進み、ワジ、ヴァルド、ヨシユエス達が自己紹介を済ましてからワジがヨシユエスに状況の説明を話し始めた。

サーベルパイパーとテストメンツで勝ち抜きタイマン戦をしていることや、その詳しいルール。ふんふん、とエステルは相槌を打ち…

「それなら構わないか……って違う違う！試合をするのはともかく、こんな場所でしちゃだめでしょ！ここは人通りも多いし、別の場所でやればいいじゃない！」

「ハッ、そんなのは俺らの勝手！しかしてめえ、遊撃士だかなんだか知らないが随分と偉そうなクチ叩きやがるな。調子に乗ってるんじゃないか。アア？」

チンピラの鏡のようなことを言っているのがヴァルドだ。リアは改めてその男を観察し始める。

上が赤いジャンパー一枚という超薄型装備。

しかも前を開けているので前は素肌がもろに見える。

ふむ…とそれらを見てからひと言。

…え、あれ…ゲイの人ですか…？

と思ったのはリアの心が汚れているからだだろうか？まあ、そんなことはどうでもいい。その間にも話は続く。

「あのね、調子に乗ってるのはあなたたちの方でしょ。あたしは常識的なことを言っているだけじゃない」

「このアマ……どうやら少しばかり、痛い目に遭いたいらしいな？ その黒髪の野郎と一緒に可愛がってもいいんだぜ？」

なん……だと……

「この人目のあるところで可愛がる……だと……なんて特殊な趣味を……しかもヨシユアも一緒に可愛がるとか禁断の三P……え、ちよ、待てよ？ 同性であるヨシユアを可愛がる……やっぱりゲイの人！？ まさかのバイセクシャル！？ どうしようなんかもものすごくムラムラしてたんですけど！？」

「誰だ今の奴！？ 出てこいや！」

なんか知らんけど呼ばれたのでとりあえず前に出る。

「私だけど……何か？」

「何かじゃねえだろ！！ なんだよゲイの人って！？」

「え、いやだつて……そのガタイでその服装は……男誘ってるようにしか……」

「……遊撃士の奴らよりてめえを先に始末した方がよさそうだな……」

「キヤー！ ゲイの人にーおーかーさーれーるー助けておまわりさーん（棒）」

支援課メンバーの後ろへとダッシュ！

「さあ！ 行くのだ！ 選ばれし勇者たちよ！」

「煽るだけ煽っておいて逃げるのはどうかと……」

ティオの発言に色々と言いたかったが可愛いので素直に……

めんなさい。と謝っておく。

そしてロイドたちに視線が向き（正確には後ろに逃げ込んだリアになのだが）ロイドを筆頭とするパーティーも騒動の中心へと近寄る。

「どうも」

「あれ？」

「ロイド君たち？」

「話は聞かせてもらったよ。まずはヴァルド。落ち着いてくれ」

「…ハッ、ここまであのアマに言われておちつけた？ふざけてんのか」

ヴァルドはゲイ扱いに怒り心頭らしく、怒気を全身ににじませている。今にも鎖を巻いた木刀片手に暴れかねん。

「まあ、確かに。それに落ち着いて話すにしても君たちも僕らに解散しろというのだろうか？ここまで来て、はい解散つてのもねえ。お互い勝負するくらいしかスジは通せないんじゃないかな？さつきからリアが観客煽ってたから、周りも不完全燃焼気味だし」

周りの一般ピーポーを見渡す。確かに大半の人間が「ええー…終わっちゃうの？」みたいな顔だった。

「なんかリアのせいで場がこじれてる気がするのには気のせいかな？」

ランディの視線がリアを向き、リアはプイツと視線をそらす。

「だって、久々に面白そうな最高の暇つぶしが…これは引つ掻き回さないと」

「おい」

しかも確信犯でありやがった。遊撃士と支援課メンバーによる冷たい視線が殺到する。それを受けさすがにやりすぎたと海よりもマリアナ海溝よりも深く反省し、リアは幼少のころから培った話術でこの場を収めようとする。

「ええと…ごめんなさい。えーと…ほらゲイの人も…」

「アア？」

「ボルドさんも…」

「ヴァルドだ！」

発音似てるんだしいいじゃないか。あ、それと、さっき私はこの場を収めるといったな？

「ヴァルドさんも…ほら、遊撃士の人怒らせると怖いよ？貴方の実力じゃあコテンパンだよ？」

「…こんな小娘が俺より上だと？ハッ、だったら証明してみろやあつ…！」

あれは嘘だ。ここまで言ったらとことん煽ってやる。目指せ乱闘騒ぎ。

ヴァルドは自らの激情のままに木刀をエステルへと叩きつける。
が…

「あ……………」

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！

ヴァルドがエステルに襲い掛かったと思ったらヴァルドは地面に座り込んでいた。

な、何を言ってるのかわかんねえと思うが…俺にもわからなかつ

た…

頭がどうに（以下略）

と、大げさに書いてはいるが、ただ単に襲ってきたヴァルドをエステルが背負い投げしただけである。「だけ」って言えるほど簡単じゃないんだけど。しかも怪我させないようにふんわりと着地させてた。

「ヴァ、ヴァルドさんが……」

パイパー下っ端が「ウソだろ……」とでも言いたげなニュアンスで呆然とつぶやく。

「えっと、大丈夫？」

ヴァルドはそれには答えずに無言で立ち上がる。

小娘にいきなり投げ飛ばされ、怪我しないように配慮されたうえで、心配される…それは彼のプライド傷付けるのには十分だった。

「ククク、ハハハハハハッ……。悪かったな。侮ったりして。だがよお、さすがにナメすぎじゃあねえのかっ！」

言下に鎖を巻いた木刀をエステルに叩きつける。さっきとは勢いもキレもまったく違い、本当に侮っていて手加減していたということとを納得させられる一撃だった。さすがにエステルの顔も強張る。

「あ、危なっ……」

「やれやれ…君たちも調子に乗りすぎだよ」

「ああもう！双方落ち着いてくれ！」

そういうものの、リアがさっきから煽っていたせいもあり、口

イドに耳を傾ける者は誰もいない。それに周りの野次馬たちの熱も増し始める。

「狐。お前はどっち勝つと思う？」

「そつすね…やっぱ順当に考えて遊撃士じゃないっすか？」

「…んじゃ、私は不良グループの方。負けた方がその屋台のラーメンおごりだ」

「え、ちょ…隊長！？聞いてないっすよ！？明後日が給料日だから今金に余裕が…」

そんな会話まで聞こえてくる。そんな中。ヴァルドがさらにその場の混乱を強くする一言を言った。

「まずはてめえらをぶちのめしてから次は白髪の年よりみてえなアマをぶちのめしてやる…」

「あ…」

最後のあ…はワジの物だった。その瞬間にブチッと何かが切れる音がした。

「追い待てやゲイ…」

ヴァルド、主人公の逆鱗に触れる。

「上等だあああああああ……！！！！！！ゲイ野郎！！！！貴様をぶっ潰す……！！」

「ほお…てめえ！女のくせして中々いい気迫じゃねえか！」

正面からそれなりに本気の怒気をにじませてでもヴァルドは動じるどころか楽しげに言い返す。それを聞きながらリアは一応さしてお

いた腰の柄から刀身まですべてが真っ黒な長剣をすらりと音もなく抜き放つ。

「殺す！！！！」

「あたしもちよつと腹が立ってきた。そっちがその気なら決着を付けてもいいんですけど？」

「はっ！まとめてぶっ飛ばしてやらあ！」

「ああ、もう。ヨシユアからも何か言ってくれ……」

ロイドはヨシユアに救援コール。

「ごめん、ボクもちよつと退けられないかな……」
「うっ……」

救援コール拒否。

「フフ、それじゃあ僕はヴァルド側に加勢しようかな」

「この際全員ぶち殺してやる…皆殺しだ…」

「だあああ！だから何でそうなるんだって」

リアの物騒な発言に頭を悩ませながら、ロイドは頭を掻きむしる。
そんな時。

「あのよお、そんなにやり合いたいんだったら別の方法でやればいいんじゃないね？」

「ん？」

助け舟は支援課のもう一人の男が出してくれた。

「せっかくの祭りだ。遺恨を残してもつまらねえだろ。だったらス

カツとする方法で決着を付けるっつーのはどうよ?」「つまり?。」

ランディの発言にリアは質問すると…

「ああ、そいつはな……。」

その提案は…

第十一話 旧市街にて（前書き）

最近しまじろうの妹である、はなちゃんに萌える。本遍と全く関係ないけど

第十一話 旧市街にて

「何でもアリのマラソンね…ま、これはこれでありか」

ランデイの提案を大雑把に簡潔に適当にまとめるとリアの今の一言に集約される。詳しく言うところ旧市街のどこどこに設置された三つのチェックポイントがあり、そこを経由して、旧市街のほぼ全域を三周する。罨や妨害何でもアリ。ちなみに二人ペア。ん…二人ペア…？

「ねえ、私にペアがないんだけど」

「君なら一人でもなんとかなるんじゃない？」

「ひどい！？」

あれ、おかしいな…目から汗が…。ちなみにリアはここに移動するまでにだいぶ怒りは落ち着いている。熱しやすく冷めやすい性格らしい

「ティオえもーん！ワジ君がいじめてくるよー！なんかあいつをコテンパンにできる道具を出して」

「……………」

「無視は勘弁していただけないでしょうか。慰めてくれるなら最高だけどせめて突っ込みを…おねげしますだあ、お代官様あ…」

「……………」

やべ、本気で泣きそう…うう…

「ちくしょう！…もういい！一人でやってや…」

といったところで野次馬の中に見知った人物を発見した。

「やろうと思っただけ……」

すぐさまその人物に接近。…その人物とは年は二十の中頃でT・シャツにジーンズというラフな格好で、男にしては少し長いかな？つてぐらいに黒っぽい青い色をした髪の毛を伸ばしていた。

「やあ、狸君」

「おや？これはこれは主じゃないですか。どうしました？」

「ちよつと付き合え」

「私がですか？私は今からちよつとした写真撮影をしないといけないのですが…」

この野郎…主君の命令に逆らうとは何事だ。しょうがない…気は進まないけど…

「あとで好きなだけ踏んであげるから」

「ニーソックスにミニスカ。後ヒール」

「…まあ、いいわ」

「交渉成立ですね」

そんな取引を小声で済まし、このDMの変態を引き連れ、皆の輪に戻る。ちなみにリア本人にはDSでもなんでもないのであしからず。

「今、ものすごく変態チックな会話が聞こえてきたのですが…」

ティオの誰にも聞かせるつもりはないのであろう小さな独り言にピクリと反応するリア。え？何で聞こえたの？まあ、追及は後でい

いや。

改めてこのマラソンの参加者選手たちに向き直る。

「というわけで。助っ人の狸」

「狸？」

「皆様、初めまして。名前の方は色々ありましてね。追求しないでいただけるありがたい。それで、私が参加することに、問題はないでしょうか？」

「あ、ああ…俺は構わないと思う。みんなは？」

「別にいいと思うわよ。確かにリアだけ一人っていうのも不公平だし」

「ありがとうございます」

そんな風に突然の参加者に戸惑う周りをしり目に、ただ、ヨシユアとワジとランディの三人だけは敏感にとあることを察知した。

それは人を殺した者にのみ付いて回る、血の匂い。それがこの青年からにじみでている事。

そんな一部の人間に、どこか不自然な空気が流れているのを狸は敏感に察知する。

「どうかなさいましたか？」

「いや、なんでもないよ。それよりも早くはじめちゃわない？」

「あ、ああ…そうそうだな」

代表してワジが答え、それを受けたランディが言う。

「んじゃ、じゃんけんで決めるか。勝ち抜けた奴から順番にってことで」

「ん、OK」

そして決まった順番が

一番 不良ヘッド二人組

二番 見た目は好青年、頭脳は変態&リア

三番 ヨシユエス

四番 支援課メンバー

となった。そしてランディが作戦タイムと言うので一旦ほかのグル
ープと離れる。

「どうする？…というか何で変態と組まなくちゃならないんだか…
女の子ならまだしも…」

「主が誘ったのではありませんか…そして作戦の方ですが…今装備
のほとんどを家に置いて来ていまして…最低限の装備しかありませ
ん」

「使えない奴…」

「いやいや。街中で写真撮影（という名の盗撮）をするのになんで
武器を持ち歩かなければならないのですか」

「んじゃ、その最低限の装備ってというのは何があるの？」

「忍者刀一本に爆弾系統が一通りですね」

忍者刀っていうのは致死軍のデフォルト装備だ。普通の刀よりは
短いが脇差よりは長い。他にもいろいろと多機能だったりするのだ
が…まあそこはWIKI先生を頼ってほしい。説明めんどい。

あと爆弾系統ってのは多種多様な爆弾にスタングレネードなどの
狸にとってのデフォルト装備。

「…それじゃあ変態はさつさと走り抜けてチェックポイントを叩く
係。私は相手からの妨害阻止とかいろいろ。でどう？」

「はい。依存はありません。というか今あなたは変態と呼びました
よね？」

「それが？」

「もつと罵ってください！！！！」

鼻息荒くしてそう叫ぶのをスルーして、速攻で作戦会議は終了。
何でこんなやつらしいんだろう…

そこでふと狸の愛用のオーバルカメラが鞆からのぞいてるのが見える。さっき写真撮影とか言ってた気が。

「誰を盗撮するのよ？」

「東通りのモルス会長の孫。メイリンちゃんですかね。まさしく、純真無垢といった性格で、兄の事をお兄たんと呼び慕っているところには最高に萌えを感じます」

「あとで焼き増し分ちようだい」

「…あなたも人のことを言えないのではないかと」

「小さい女の子を可愛いと思うのは誰でもそうでしょ」

これ警察に聞かれたら捕まってるんじゃないだろうか？すぐそこに超真面目な警察がいるのに。それはともあれ作戦タイムは終了。再びスタートラインに集まる。そこで彼女は気づいた。気づいてしまった。それを隣りの変態に問う。

「ねえ…さつきからティオちゃん目が恐ろしく冷たいものになってるんだけど」

「ティオ…？ああ、猫耳少女の事ですか」

「ねえ…なんか今のあなたの発言の次の瞬間に今のティオちゃんの視線で人ひとりを殺せそうなものになったんだけど…」

「ふむ…聞こえてるのかもしれませんがね」

今リアたちはかなり小声でしゃべっている。しかもティオとはかなりの距離がある。…常人より耳がいいというだけで説明できるも

のでもない気がする。

そんなことを考えたものの、次の瞬間には「まあいいや」と呟き頭を切り替える。

問題なのはさっきまでの会話が聞こえてたとしてどう言い訳するかだ。今の自分が客観的にあの会話を思い出してもかなり変態チツクだった気がする。自分だったら愛想笑いしながらちよつとずつ距離を取るレベルだ。どうしよ？あつちのゲイ野郎とかならまだ気にしないで済むんだけど…ティオちゃんはなあ…辛い。

何気にここ一カ月ほどともに働かせていないア他mを回転させている間に、他の参加者たちの準備も整ったらしく、審判的存在であるエリイが口を開く。

「それじゃあ号令は私が務めさせてもらうわね。最初の空砲で第一チームがスタート。それから5秒毎に空砲を撃つからそれで第一、第二とスタート。」

「タイムのカウントは私が担当します」

タイマーを持って準備しているティオに手を振って見た。…ガン無視された。マジでどうしよう…つくこんなことならちよつと不利にはなるが変態と組まなければよかった…くそう、数分前の自分をぶん殴ってやりたい…と結構マジで落ち込んでいた。

「あー…なんかテンション下がる。さっさとはじめよう。そして終わらせよう」

「いいえ、真打ちがまだよ!」

見知らぬ女性の声が響いた。

「グ、グレイスさん?」

「確かクロスベル・タイムズの記者…だったけ?」

クロスベル・タイムズというのはクロスベルでの事をまとめた新聞の事だ。そのまんまだね。

「やつほ。ボーイズ&ガールズ、何だか面白そうなことをやろうとしているみたいじゃない？…ってあれ？狸さん？何でここに？」

「はは。どうも、先日は助かりました」

「いやいやー。それはこちらですよ。おかげ様で特ダネつかめましたし」

それを聞いたリアは誰にも気づかれないようにこっそりと、唇の動きを最小限にまで抑え、ギリギリ狸にだけ聞こえるように声を調整。はたから見ればただ突っ立っているようにしか見えないようにして問いかける。

「特ダネって？」

「市長さんの秘書の…えーとアーガストさん？の黒いうわさを色々」と

狸も同じようにして答えた。

「…アーネストさんの事？」

「男の名前なんてどうでもいいですよ」

実にこの変態らしい。

「？狸さんどうしました？」

「おっと、失礼。少し考え事を」

「そうですね。あ、そうそう。この前また面白そうな話が聞けたんですけど、後でどうですか？」

「お、良いですね。このレースが終わったらお伺いします。面白そうな話を持ってね」

「ええ。楽しみにしてます」

「それで、グレイスさん、何をしに？」

ロイドがいい加減話を戻そうとしたのか軌道修正。

「おおっとそうだった！その話お姉さんも一枚噛ませなさいよね！」

「噛ませなさいって」

「何をするつもりだ？」

そのヴァルドの疑問にグレイスはどこからともなくマイクを取り出し、はっきりと聞き取りやすい声で告げた。

「レースと言えば実況よ！カメラマンも連れてきたから思いっきり盛り上げてあげるわ！」

そういつてレースが一望できる建物へと駆け上がって行った。

「…んじゃあ、始めるとするか！」

ポカンとしている一同だったが、ランディの声にはっとなる

「それじゃあ皆。スタートラインに」

エリイに空砲を撃つ用意ができる。

「それでは、カウント始めます……3、2 1 0」

パン！

同時に空砲が響き、不良のヘッドグループがスタートした。

第十二話 レース（前書き）

あー…学校行きたくねえ…
今回はいつもより長め。

第十二話 レース

最初の空砲の五秒後。エリイ上空へと空砲を放つ。

同時にパンつと、合図の音が鳴る。

瞬間。狸が疾駆した。

瞬時にチェックポイントへと近づく。すでにチェックポイントを叩き終え、その場を後にしているワジ&ヴァルドには追いつかなかったが、早い。

『へっ………は、早い！狸選手早すぎます！リア選手が置いてけぼり……いや、足を止めた！？』

狸の後ろリアはで足を止め、何事かをぶつぶつと呟く。

「天にましわす空の女神以下略…壁よ」

そう、小さくつぶやくが特に何も変化があるようには見えない。が、リアはそれで満足したように一瞥してから、チェックポイントを通過して戻ってきた狸と合流。そのまま次のチェックポイントへ向かう。そして、次に出発した支援課メンバーの二人が不思議そうな表情を浮かべながらも、ダッシュし…

突如、何もないうところで壁にぶち当たったかのようにしりもちをついた。

「な、なんだこれ！？」

「リアの奴がやりやがったのか!？」

そして、一瞬だけ薄く、透明な壁のようなものが視認でき、それが砕け散る。

相変らずふざけた詠唱だが、効果は結構なものだ。薄い、視認もできない壁を出現させる。

「時間がなくて即席だったから、認識されてたら簡単に突破されたのだけど…」

「そんなことより、来るようですよ!」

目の前を見るとまだ遠いがチェックポイントの前にワジと、大きなドラム缶を担いだヴァルドがいた。

「ゲイ扱いしたこと後悔させてやらあ!」

まだ根に持つてるよこの人。

「どうします?」

「…私の後ろにいて。合図を出したらチェックポイントを」
「了解です!」

何をするかの説明もしていないのにそれだけで納得してくれる狸。おそろくリアの事を信用しているのだろう。うん。あの変態チツクなところがなければ普通に有能で使える人間なのに…などと、ぼやきながら目の前に集中する。

そしてかなり近くにまで近づき、ヴァルドがドラム缶を投げようと力を込めたところで…

「ホロウスファイア!」

「なっ！」

瞬間。リアの姿が掻き消える。光の屈折を利用して、自らの姿を消す事が出来るアーツだった。よくよく見れば完全に姿が消えるわけでもないの見破られるが、今回は不意を突いてそれをカバーした。そして、ドラム缶を投げつけるタイミングを失ったヴァルドの懐へと近づき、再び姿を現す。

「狸！」

そう、合図を出しながら、ヴァルドの鳩尾に拳を沈める。うめき、崩れ落ちる。が、すぐに立ち上がるだろう。

ただ、隙はできた。その脇を狸が駆け抜け抜けチェックポイントを叩く。リアはそのまま、ワジにも攻撃を叩き込もうとしたが…

「さすがにそこまではやられないよ？」

「おっと…」

逆にワジのけりが飛んできたのでそれを躲しながらその場を後にする。これでトップになった。しかも、ワジ達は後ろから追いついてきた支援課の二人と交戦に入ったらしく、武器と武器がぶつかり合う音もした。

「ヴァルド…あれで終わったと思うなよ…っ！」

「まだ白髪扱いを根に持っているのですか？」

「あの時あなた居たっけ？」

「見てましたから」

「なるほど」

そのまま疾駆し、三つ目のチェックポイントも難なく叩く。途中

で不良二人組とすれ違ったがそのまま素通りした。…いやリアがヴァルドに足払いをかけていたが難なく躲かれた。根に持っているのはお互い様だ。

そして、一周し終わり、スタート地点にまで戻る。そこでグレイスの実況がリアの鼓膜を振るわせる。

『おーっと！今のところトップは意外や意外！…えーと…何チームと呼ばばいいんだろ？』

「えーと…一般ピーポーズ？」

「ネーミングセンス壊滅的ですね」

「黙れ変態」

『しかも、走りながら即興漫才をやるほどの余裕！…何者なんでしょうね。一般ピーポーズは』

なんかギャグ狙いにしても面白くないし、言にくいし、かつこよくもない名前である一般ピーポーズが定着している事実はさておき、再び一つ目のチェックポイントを叩く。そこで再び折り返そうとしたところで二つの走ってくる影。遊撃士の二人だ。

「小細工はきかなそうよね…」

「ここは貴方にお任せします、私はお先に」

「ええー…女の子を見捨てるって男としてどうよ？」

「はっはっは。適材適所です」

「…むなしくならない？男で年上のあなたより女の子で年下の私のほうが強いって事実」

「……それはそれでいい！！」

何がツボに入ったのかは知らない。考えたくもない。

「世の中には逆リヨナというジャンルがありまして、簡単なところ
で言えば、女性に股間を蹴り上げてもらったり…」

「説明するな、変態があああああああ！！」

「あふん」

生理的嫌悪から狸を殴り飛ばす。奴は幸せそうな顔をしながら星
…そうマジで星になった。リアの脳内でキラーンという擬音が響い
てくる…ふむ…これがギャグ補正…

そこで気づいた。

「あ、やべ」

気づいたらエステルの武器である棒が目の前にあった。それをギ
リギリのところで長剣で受け止める。

しかしそれだけでは終わらずに、目の前に二本の剣の内の一本を
振り上げているヨシユアがいた。

「つく、う…」

その波状攻撃を銃剣で受け止める。が、さすがにベテランと言え
る遊撃士二人の一撃は受けきれずに、しりもちをついてしまう。そ
の際にチェックポイントを通してからヨシユエスは先へと向かう。

「ああもう！仲間割れしてる暇はなかったのに！」

「全くです。今度からは気を付けていただきたい」

すぐ隣に狸がいた。

「あなた星になってなかったっけ？」

「あなたの一撃に『愛』があれば私は何度でもよみがえる！」

「んなもん込めた覚えはない」

再び殴り飛ばしそうになるのを必死にこらえてから、すぐに態勢を整え、走り出す。そこからの二週目は特に特筆すべきことはなかった。リア達の順位が再び繰り上がり、順位は上から順に一般ピーポーズ、ヨシユエス、不良ヘッド、支援課メンバーとなり三週目。それは狸が一つ目のチェックポイントを通過した時に起きた。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

そんな獣のような雄たけびとともに、ものすさまじい闘気。びりびりと肌でその威圧感を感じる。リアはその感覚に覚えがあった。

「ウォークライ……ランディの？」

ウォークライ。獵兵たちが使う、自らを鼓舞することで爆発的な戦闘能力の向上を約束させる技。

「ぐいぐいぐい」

「私はランディさんのウォークライを見たことがないので何とも言えませんが、元猟兵たるみっしりの話だと、結構なものだと」

「そう…急に」

ウォークライでの戦闘能力の向上は個人差がある。つまり、今ウ

オークライを使ったであろうランディの戦闘能力は未知数。やはり戦うのならば相手の戦闘能力をあらかじめ知っておきたいものなのだ。そんな思いで二人は走るペースを上げ、二つ目のチェックポイントを叩き、振り向いたところで…。

「うわぁ…」

まだ、距離はあるものの、こちら辺はまっすぐな直線なので遠くまで見える。先頭はヨシユエス、次に不良ヘッドWで一番後ろをランディが非常に獰猛な笑みを浮かべながら突貫し、その隣でロイドが追走しているが見える。やっぱり結構怖い。

リアは軽い恐怖を脚力にかえて走り出す、ヨシユエスとすれ違ったがこちらにもランディに追いつかれたくないからか互いに妨害はせずにさっさとチェックポイントへと向かう。

そして、三週目の三つ目のチェックポイント。つまりは最後。

さすがにここで妨害しなければ相手にトップの座を譲る事になると思ったのだろう。ここが正念場だとして、ヨシユエスが武器を構える。

「しょうがないから正面突破！」

「了解です…戦技、闇隠れ」

了解と言いながらも狸は相手に襲い掛からずに気配を消し、姿をも消す。リアはそれを見やりながら二人へと突貫。ベテラン遊撃士の二人を相手取る。

「ふふん。一人で勝てると思ってるの？」

「さぁ…どうだろ？」

長剣でエステルを薙ぐが、エステルはそれを軽く受け止め、

棍棒を連続で突き出して反撃。しかもそれを大きく後ろに跳んで躲したとみるや、そうなるのが解っていたかのように着地地点にヨシユアが待ち構えており切りかかってくる。しかし、それぐらいは読めている。あっさりとヨシユアの攻撃を身を低くすることでかわし、余裕の表情を見せた。

「いやはや、ほんと見事ね…息ピッタリ」

「それはどうも！」

再び互いに打ち合おうとしたところで、わきから乱入者が現れる。

「うらあっ！」

「僕たちも混ぜてもらおうか」

その一体二の戦いに不良ヘッドの二人も混ざり、完全な乱戦模様となる。

そんな中それを無視してチェックポイントへと向かう影。…ロイドだった。

その判断にリアは内心で疑問符を浮かべる。ゴールへと戻るには、またもや乱戦の中を通過しなければならぬのだが、そこを通るのには後はゴールすれば勝てるといった人間を簡単に通すだろうか？否だ。結果的に乱戦を形成していた人間たちの目標がロイドへとシフトする。

それが狙いだとも気づかずに。

最初に気づいたのはリアだった。

「ロイドだけ…ね…してやられたかな」

しかし、もう遅い。

「ヒヤッホウ！食らえ！」

屋上に駆け上っている一人の赤毛。それが上空より強襲。ロイドを除いたその場の人間たちがまとめて吹き飛ばされる。

「ぐっ…」

リアも例外ではなく、ガードは間に合ったものの、すぐに立てそうにない。周りもそれは似たようなもので、それを一瞥したランデイが背を向ける。

「ロイド！今のうちに行くぞ！」

「ああ！」

そして走り出そうとしたその瞬間。虚空より声が響く。いや、声だけではない。突如あたり一面に煙が蔓延する。

「ゲホッゴホッ…催涙ガスか！？」

催涙ガス。相手の涙腺や嗅覚の細胞を刺激し、涙やら鼻水が止まらなくなる化学兵器。そしてそれを使ったのは…

「ふふ…油断大敵ですよ。ランディさん？」

「なっ…」

「ランディ！？」

ずっと姿を消していた狸が姿を現す。奇襲するのに最高の機会が訪れるのを伺い、そこに催涙ガスを使うことでさらに奇襲成功の確率を上げる。

結果は成功。ランディは普段なら余裕で受け止められるであろう忍者刀で一撃をスタンハルバートでかろうじて受け止め、膝をつくことはなかったが、動きに支障があるぐらいのダメージがとおる。

「ゲホツゲホツ…っちい…やってくれるじゃねえか…」

「ハンター・ハンター三巻を読み直してやることですね」

狩りは獲物を狩った瞬間が一番危険なのだ。

それはともかく、動きが鈍ったランディを体勢を立て直した各チームが追いかけ始める。その中でも一番ゴールに近かったのは支援課メンバーとリア&狸だった。この二チームだけはすでにチエックポイントを通過しているので直接ゴールに迎えるからだ。そして結果は…

「おおっと！一位は…えーと…どっちだろ？まあ、一般ピーポーズと支援課メンバーの二チームが同着一位！それに続いて残りの二チーム同時にゴール！何ともパツとしない結果でしたが、皆さんお疲れ様でした」

そんな感じで、レースは終わった。

「ぶっはぁゝ運動後のジュースが美味い…」

あ後は適当に解散し、狸はグレイスとかいう新聞記者とデート…じゃなかった。情報交換に行くというので分かれた。他は知らない。それにしても久々にいい運動をした。こういうのもたまには悪くない。リアは東通りで買ってきたジュースを飲み干しながら自分の家であるおんぼろマンションへと帰宅しようとする。

「あれ、リア？」

「おろ、支援課メンバーの諸君？」

マンションから出てすぐのところにその男女の集団はいた。とりあえず距離的に一番近いロイドに問いかける。

「どうしたのよ、こんなところで？」

「いや、さすがに体力が尽きた…」

「情けないわね…」

「というか何でリアはぴんぴんしてるんだ…？」

確かに旧市街中を走り回ったのにぴんぴんしているのは不思議だろつ。

「気合いよ」

なんか全員に「はあ…」って同時にため息をつかれた。そしてジト目。

「ええい、都会っ子め…やっぱあれか！？都会の人間はみんな冷たいのか！？そんな冷たい視線で見ることでしか答えられないのか！？」

「それ以前にあなたの言動に問題があるかと」

ティオちゃん酷い。

「はあ…今は亡きお姉ちゃん…私はもう都会の荒波にもまれてもう
くたくただよ………まあ、それは別にいいわ。それで何の話してた
の？」

「さつきヨシユアとエステルが黒の競売会つていうのがあるってい
うのを教えてくれたのよ。リアは何か知ってる？」

あまりにもさらりと姉が死んでいるという身の上話をしたが、あ
まりにもサラリだったので全員が聞き流す。そしていかにもダメも
とで。と言った感じでエリイが聞いてきた。

「うん。知ってるわよ。それがどうしたの？」

「知ってるのか！？」

その場の全員が目を丸くしていた。支援課メンバーはリアの事を
各地を旅してきたとはいっても普通の一般市民だと思っているのだ
ろう。

「ルパーチェ商会主催のオークション。毎年各地の有力者を集めて
生誕祭最終日にやるのよ。会場はえーと…クロスベルのツートップ
の片割れのハルマゲドン議長だかの別荘…」

「ハルトマン議長だと思っわ…」

「あれ、そうなの？」

エリイの指摘。ちなみにこのことは狸の報告にあったことである。
狸の野郎っ…！相変わらず男の名前へ関しての記憶能力は問題だ。

「んでそのハルトマン議事長の別荘で毎年開催。出品されるのは盗
品とか曰くのあるものばかり。わーお。犯罪臭がプンプンするわね」

「……………」

「ま、止めるのは無理だろうけど」

「何でだ？」

特にクロスベルの事に詳しいわけでもないのであるうランディが聞いてくる。

「だってこの自治州のツートップの片割れであるハルトマン議長が協力してるのよ？警察じゃ無理でしょ。権力アタックでつぶされるわよ」

「だったら遊撃士は…」

「遊撃士はあくまでも市民の味方。直接一般市民に被害がない限りは動くことはできない。あれって盗品とか黒い物を扱ってるって言うっても要するにただのオークションだもの」

ほんと上手くできてるわね、これ。内心でそう呟く。

警察には権力と言う盾を使い、遊撃士に対してはルールで縛る。

…縛るという単語を思い浮かべると同時に女の子を縛ってあんなことやこんなことを…なんてことを妄想を脳内で垂れ流したリアはもはや末期に違いなかった。

「まあ、そのほかにも各地の有力者が集まってるから、別の有力者にパイプを作ろうって人も多いみたいだけど…えーと？何で私はいかにも怪しいものを見る目で見られているの？」

代表してロイドが言った。

「リア。君はなんでそんなことを知っている？遊撃士のベテランであるヨシユアやエステルでも知らなかったようなことを」

「ん、噂」

「どう考えても噂レベルじゃないだろ」

デスヨネー

「だから前にも言ったじゃん？私って身喰らう蛇の執行者なの」

「そもそもその身喰らう蛇ってのはなんだ？」

「私の自作小説に出てくる悪の犯罪組織。それは影からゼムリア大陸を動かそうと日々暗躍をつづけ…」

「……はあ……」

おい。だから皆でシンクロしてため息つくな。確かに自作小説って部分は嘘だけど。

「冗談はそれぐらいにして、特に深い意味はない。知り合いが情報屋を営んでるのよ」

「そうだったのか？」

「うん、それだけの事よ」

純度100%の嘘である。

しかしロイドはそれで納得してくれたらしく、そうか…といった顔をする。

「もういい？」

「ああ、そうだな。問い詰めるような言い方をして済まない」

「気にしてないわよ。ま、私が知ってる黒の競売会についてはこのぐらいね。と言うことで情報料として代金を頂こうか」

「…そういうのは最初に言うべきじゃないのか？」

「ウソに決まってるでしょ。ロハでいいわよ。そこまでミラに困ってないし」

言って首をすくめる。

「ま、なんかあったら聞きに來て頂戴。もしかしたら力になれるかも」

「そうだな…もしもの時は頼りにさせてもらおう」

「そっか。それじゃあ、バイバイ」

そう言い残し、今度こそリアはおんぼろマンションへと帰宅した。

第十三話 リーシャとの対面

「ん…？」

レースがあつた翌日の事。生誕祭三日目。リアはふと読んでいる本から顔を上げる。

「お隣さん…帰ってきた…？」

リアが本を読む手をやめた理由。それは隣の部屋から響いてくる物音にあつた。

実はいまだにリアはお隣さんと顔を合わせてなかったりする。なぜかと言えば、お隣さんが早朝に家を出て、夜遅くに帰ってくるというのを繰り返しているからだ。

朝は大抵の場合まだベッドの中だし、さすがに夜遅くに誰かの家を尋ねるほど常識知らずでもない。

しかし、今はまだ七時。微妙な時間帯ではあるが、これを逃すと何時挨拶に行けるか知れたものじゃない。と言うわけで部屋で過ごす時は下着派であつたリアは痴女の称号を得ることを回避すべく、私服に着替えてから軽く身だしなみを整える。そうしてから部屋をでて、五歩で隣の部屋へと到達。そしてノック。

「こんにちはー！結構前に隣に引っ越してきたリアちゃんです。挨拶に来ましたー」

その数秒後に中から一人の少女が立て付けの悪いドアを開けて出てくる。

胸でっけえ…揉んでみたい…

これがリアのお隣さんへの第一印象だった。中年のオヤジっぽい。それを顔に出すような単純な人間でもない。そんな第一印象を心の奥底に仕舞い込み、友好的な笑みを浮かべる。

「どうも、初めまして。私はリア・ルアルデイ。二週間ほど前に引越してきました。以後よろしく」

「あ、ご丁寧にどうも…リーシャ・マオと言います」

そして、リアはお隣さん…リーシャの表情を見つめ…「？」と疑問符を浮かべた。

なぜ、こんなところに？

リアがそう思ったのではない。リアはリーシャからそんな感情を読み取る。表情の変化はほとんどない。しかし彼女の息づかいや、こちらを見つめる仕草、その他もろもろ…それらを統計して、そんな感情を向けられていると判断する。別に感情が浮き出るのは顔だけというわけでもないのだ。それともう一つ。

裏社会に関わるものについて回る独特の雰囲気。それが僅かに滲み出ていることにも気づく。

直接の戦闘に関しては執行者内低レベルだったりするものの、人を見極める観察眼や、頭の回転。軍隊の指揮官としての才能やらに關しては執行者一の彼女。そうそう読み間違えるとは思えない。

裏社会関係の人で、私に関わりのある人物。検索をかけてもこの少女に關しての事は全く記憶にない。というかこれだけ印象的な胸…げふんげふん。印象的で綺麗な顔をしている少女を早々忘れろとは思えない。

「ねえ、私たちってどこかで知り合ってたっけ？」

とりあえず何かヒントを聞き出せないかと質問。

「いえ、初対面だと思いますけど…」

嘘だな。とこれまでの人生の経験からそれを見破る。私に嘘をつきたいのならオズボーン宰相並みの鉄仮面を身に着けてから出直すがいい。

さて…となると私は相手の顔を見れる状態ではなく、相手からは一方的に顔を見られた状態で顔を合わせたことがある…？多少こんがらがってきたが、ふむと内心で考え込み…

銀…だったりしないわよね…？

以前星見の塔であつた凶手。それならこちらが顔を覚えていないの仮面のせいでもそも顔が見えていなかったから。けどあつちからは顔を覚えられた…と納得できる。

でもなあ…この巨乳をあの黒衣で隠すのは無理があるよなあ…とお腹より上で肩より下にある脂肪の塊をまじまじと見つめる。

「あの…」

あ、見てるのばれた。ジト目で見られる。初対面（？）で胸を見つめるって…うん、変態チック。なので反省してからこの件はいったん保留しておくことにする。

「…失礼。とりあえずお隣同士よろしく」

「…はい、そうですね。よろしく願います」

多少引き気味であつたが笑顔で返してくれた。おお…ティオちゃんを筆頭とした絶対零度の視線や、遊撃士協会を筆頭とした敵意に満ちた視線ばかり受けてきた私にとってはかなりの癒し…いい娘だ…ちよつと感動する。

この子とは仲良くやりたい。リアは単純にそう思う。だからこゝう提案していた。

「ねえ、夕食まだなら、今からどこかへ食べに行かない？親交を深める意味もかねてさ」

「あ、はい。いいですよ。どこにします？」

快く承諾してくれたリーシャに対して五秒ほど黙考。

「…トリニティとか？」

「何のお店なんですか？」

聞き覚えのない店名だったのか首をかしげるリーシャ。

「バーよ」

「…リアさんって未成年ですよね…？」

「細かいことは気にしない。いいじゃないのよそのぐらい」

別名ワジの根城のバー。テストメンツのたまり場。ワジとは立場を抜きにすればそこそこ気が合うんだよね。うん。

そんな結構入り浸っているそこそこお気に入りの店だったりするのだが、結構真面目らしいリーシャが難色を示す。

「えと…お酒はさすがに…」

「あ、そう…それじゃあ、リーシャのおすすめは？」

「私ですか？そつですね…龍老飯店なんてどうですか？」

「えーと…ああ、旧市街を出てすぐにある中華店だったけ？うん、いいわよ。そこにしようか」

ちよつと準備してくるから待ってて。そついつて、いったん部屋に戻った。

リーシャは内心では驚いていた。

何故驚いていたか。それはあの時星見の塔で出会った少女が隣の空き部屋に引っ越してきていることに關してだ。

今日は珍しい事に本番の後の自主練もせずに早めに帰宅。そして、部屋に戻ったと思ったらお客さん。しかもそれがあの時の少女だったのだ。おそらく、ここ数年でただ一人、『銀』としてのリーシャに傷を負わせたリアに。

騙し討ちだったとはいえ傷を負わせたのは事実。そして、手加減できるほどの余裕。リーシャが…いや『銀』が警戒している人物の一人。

そんな相手なのだが…

「むう…別に少しお酒を飲むぐらいじゃないか…」

そんな風にぐちぐち言っているリアはちよつとだけ破天荒な年相応な少女にしか見えなかった。

しかもどこもかしこも隙だらけであり、今の何の装備も持っていないリーシャでも容易に殺せてしまいそうならいだ。いやしいけど。

ここは龍老飯店という飲食店。なぜこんな風にぐちぐち言ってるかと言えばこの店主が未成年の飲酒はダメ絶対。という人物だったので酒の注文を受け付けてくれなかったからだ。というか当たり前である。

「やっぱり、未成年なんですからやめた方が…体に悪いと思いますし…」

「でもさーまあいいわ」

出してくれない物はしょうがない。そう割り切ったらし…。

「あとでトリニティ行くから」

まだ諦めてなかった。それに対してリーシャがやはりやめるように促そうとしたところで、この店主の一人娘兼ウェイトレスであるサンサンが料理を運んでくる。リーシャのここクロスベルに来てからの最初の友達でもあった。

「はい、お待ちどうさま。龍老炒飯二人分ね」

「お、おいしそう」

「でしょ、お父さん、料理の腕は一品だからね」

そう笑顔で受け答えしながら、手慣れた動作で料理をテーブルに並べていく。そして、それ以上の言葉を発することなく、忙しそうに去って行った。ちょうどお客の入りがピークの時間なのだろう。

「中華料理かあ…あまり食べないのよね」

「そうなんですか？」

「うん。基本和食なのよね。味噌汁に焼き魚に漬物に白米」

そう言いながら、ぱくぱくとおいしそうにチャーハンを平らげていく、リアを前にリーシャもチャーハンを口に運んでいく。相変わらず美味しい。そして、口にチャーハンを詰め込んだ状態でリアが言う。

「ふおういへばふいーふあはふおふおはふあひふあふお？…さあ、私は今何と言ったでしょう？」

「…《そういえば、リーシャはどこから来たの？》ですか？」

「すっげえ…まさか答えられるとは…」

「分からないと思うような問題を出さないでください…」

リアは本気で驚いているのか目を丸くしている。そんなリアの質問にリーシャも答えた。

「私は共和国出身ですよ。最初は旅行で来ただけだったんですけど…」

「共和国…ね…」

なぜか意味深な感じでそう呟いていた。あくまで独り言っぽかったのでリーシャはそのまま続ける。

「イリアさんに捕まっちゃいまして、今はアルカンシエルでアーティストを…」

「イリア…どこかで聞いたような…？イリア…イリア…あー……あー！有名なアーティストなんだっけ？今アルカンシエルで公開してる劇の主演」

「はい。そうです」

「すごいものね…私と違って有意義な仕事だ」
「ええ、本当にすごい人です。イリアさんは」

リーシャはどこか満足げに答える。自分の尊敬している人物がほめられればそれはうれしい。だから、リアがけ、一瞬だけどこか羨むような表情を浮かべたことには気づかずにいる。

「へえ…じゃあ、リーシャも有名人だったリ？」

「いえ、私はまだ新人ですし…リアさんはどうしてここに？」

「ん、私はもともとここ出身なのよ。ゼムリア大陸をあてもなくグルグル回って今は里帰りつてところかしらね、国によって文明の発達とか全然違うのよね。驚いたわよ」

「そうかもしれないね」

「うん…あ、そうそう。リーシャって共和国出身なのよね」

「はい。そうですけど…？」

そして相変わらずのどこか気の抜けた笑みで続きを言う。

「それじゃあ、銀って人のうわさを聞いたことないかな？」

「…え？」

思わず絶句する。それをリアはきょとした表情で見返し、次にどこか気まずげな感情を浮かべる。

「あー…なんかまずかった？」

「あ、ええと…何でもないんです…なんでも」

「そう、いや、ごめんね。変なこと聞いて…っと、ごちそうさま」

いつの間にかリアの皿の上に載っていたチャーハンがすべて消えていた。リーシャも後二口ほどだったのでさっさと平らげ、ごちそ

うさまでしたと言つて箸をおく。

「なかなか美味しかったわね」

「…あ、はい…そうですね…」

どこか重い空気。ふむ、と考え込むそぶりを見せ、リアはこの空気にふさわしい、トーンを落とした声を出す。

「実は一目見た時から思つてただけ…」

「…なんでしょう」

まさか銀であることがばれた…？いや、そんなことはないはずだ。証拠も何もない。それに、この人には正体を見破られなくなかった。まだ短い付き合いだが、今この食事を共にした時間は楽しかったのだ。

自分の正体がばれて、嫌われてしまったら仕方がないと割り切れる程度の細い糸ではある。しかしリーシャはリアに対してそこそこ好意を持ち始めている。嫌われないとは思えない。

そして、彼女は口を開いた。

「どうしたらそんなに胸が大きくなるの…？」

「…はい？」

予想斜め上と言つか明後日の方向の質問に思考が停止する。

「いやさ…なんというか…その…コンプレックスを…」

「ええと…」

「つくう…これも遺伝なのか…？お姉ちゃんもあまり大きくはなかったしなあ…」

「その…これはこれで肩こりが酷いですから…むしろ気苦労が増え

て…」

「あはは…冗談冗談。本気で聞いているわけじゃないわよ」

目が本気なのだが。

「さ、帰ろう？ 食べ終わったのにいつまでも居座ってたら迷惑ですよ」

「それもそうですね」

そういつて立ち上がったところで、リーシャはふと思う。

もしかして嫌な空気を消すために突拍子もない事を言い出したのだろうか…？と。

しかし、それはまだ出会ってから一時間と立っていないリーシャにはわからなかった。

いったん家に戻り、リーシャと別れたあと。もう外はすっかりと暗くなり、殆ど光のない旧市街ではそこそこ星が綺麗に見える。そんな旧市街のとある一角にリアの姿があった。

「狐。いる？」

「ここに」

そういつて現れたのは狐面の男でどこにでもいる普通の町娘にしか見えない少女に対して跪く。全身が隙だらけであり、もし初対面で、彼女が暗殺等のターゲットとなったらチヨロイ任務だと判断し油断してしまいそうだ。

しかし、狐は分かっていた。それは擬態であり、演技。そうやって相手を慢心・油断させ、奇襲するための彼女独特のスタイルだということ。

そんなリアは余計な挨拶等の一切を省き、本題に入る。

「リーシャ・マオ。知ってる？」

「はい、アスノリア様の隣の部屋に住んでいる大変よい乳をしている女性でございますな」

「……………」

リアは軽い同族嫌悪を覚えつつも、狐の話に耳を傾ける。

「それと只今公開しているアルカンシエルの劇において副主演を演じているとか……」

「へえ……本当に有名人だったんだ……まあ、それはいったん置いて、確証はないけどリーシャはたぶん銀の正体だと思う。共和国出身らしいし、ちょうどあなたたちが報告してきた銀の出没時期とも一致してる」

「…ふむ」

そういつてしばらく考え込み…ぽつりとつぶやく。

「裏では孤高の暗殺者で中身は美少女…萌えますな」

「…そうね」

なんとも残念な主従である。今度は結構本気で同族嫌悪を覚える。こいつと言い狸といい、なんで致死軍にはこんな人間しかないんだろう…。一応これさえなければ有能なので、今のところクビは思いとどまっているのだが。

「して、なぜそれを私に？」

「ん、一応知らせておこうかってね。ただ確証がないから、もしかしたら可能性があるかもってぐらいに思っておいて」

「承知…調べますか？」

「それはしなくてもいいわよ。別に銀と敵対関係にあるわけでもないし、それに…」

いったん言葉を切る。

「諜報って言うのは誰にも知られたくないような秘密を暴くこと…仲良くやりたいと思うてる人にそんな最低なことはしたくないわよ」
「…そうですね」

狐も…いや、彼が統括している致死軍の人間の者は、誰もがこの仕事が入として最低の行為だとわかっている。しかし、それが要になることがあるというのも確かなのだ。

それだけ、お疲れさん。そう言い残しリアは歩き去る。そして狐も虚空へと消えた。

第十三話 リーシャとのご対面（後書き）

重大発表！

…ストックが切れた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2726z/>

狂った少女はただ笑う

2012年1月13日13時46分発行